30
194

栗島狹衣著

詩人業平

春陽堂書院

帝國圖書館藏

明治三十四年 帝國圖書館藏

業平は男也、業平は詩人也、業平は武人也。業平の婦人を愛するや、世を驚かしむるの詩篇作為の真情流露して毫も僞らず、誠に男らしく詩人らしく武人らしき也。僕常に人に公言す、日本は業平以外に健全なる頭腦の詩人なし、日本に生れて伊勢物語を讀まず且つ業平を欽慕せざる者は病人也、不具也、具體的にいへば今の哲學者、詩人、坊主、みな此類の病人也、不具也と。友人狹衣栗島君、情に脆くして文に巧なるの人、此に我業平の爲めに一書を著して氣を吐く、何ぞ彼道學先生輩の講說する所に比して太しく有益多趣味なるや。僕感嘆して覺えず泣かむとす、又小悧口にして僞善なる現代の學風に慊からざれば也。

明治卅四年澁谷の里に人と住める秋興謝野鐵幹序す。

詩人業平序

在原業平、これ弓胡籙負ひて軍衛に仕へたる平安朝當時の近衛陸軍中將たりし英雄なり。

歌を善くすと雖も亦陸軍の軍人なり。軍人なりと雖も、美男子にして女性界を征服するの將軍たりしなり。

而して忠君の情ゑ厚く、當時王權の衰へたるを慷慨せる第一の朝臣たりしなり。彼れや忠君の人、美男子、軍人、詩人、此四者を兼ぬ。

忠君の心を以て體となし、弓箭を執りて朝敵に向ひ、男性美を以て女性美を征服す、其歌ひたる凱歌は天下後世に殘りて、今も尙ほ鳴りひゞけり。男子の能事此に終れりと云ふべし。

やさしき美の内には、たけき心を存し、たけき心の内には、又やさしき美を有す。勇と美と、これ美の大なるものに非ずや。

今世人物滔々として下落せり。此くまでやさしく、美しき思操を有せる軍人果して有

るや如何。此くまで心雄々しき文人詩人果してあるや如何ん。

業平の細行に就きて、此間ま道德學の講義を挿入すること勿れ、教育家の僞善の論を試むるまと勿れ。

友人栗島狹衣君縱横自在、艶麗高雅の筆を以て此美と勇とい英雄を叙す、余一讀して心恍惚たり。思ふに君も亦當世に慨する所あるものか。

余は業平の人物を慕ひ、其歌を愛讀するものなり。狹衣君の、此著に序を求むるに及び、喜びて君の請に應じ、一文を草して序に代ふ。

明治卅四年十一月

東京芝浦の寓居にて

木村鷹太郎

小言

一、本書に業平の一生と題するものは、曾て朝日新聞に掲載したるわが舊稿なり。當時われ業平を研究するの念頻りにして、たゞ『其政治家としての詩人』に心を傾くる事多かりき。故を以て言ふ處も詩家たるの眞體を寫すに乏しく、而も論旨幼稚にして文辭又拙劣、見るに堪へざるものあり。然れどもこれ業平が一生を究むるには、缺く可らざるの要項なしとせず。聊か補正して此卷頭に掲ぐるものは、狗肉を鬻ぐに毫も僞なきの眞面目を表するもののみ。豈他あらんや。

一、われは業平を敬慕する事已に久し。而して初めには其政界の傑物たりしに感じ、次には詩才の得難きを欣び、終には其資性の清麗なるに動かされき。業平の性は蓋し靈泉の如く透明なり。一の僞善なく一の小刀細工なし。而も閑雅雄麗の大丈夫たりしをや。これ日本男子の標本なり、純然たる日本思想を抱ける大男兒なり。われこゝに至ては其人を敬慕する念もまた益々壯ならざるを得ず。

一、歌に人感あり、俳に芭蕉忌あり。何ぞ男子の好標本たる業平に篤からざる。よ

ろしく業平忌を興して其人を弔ふべし。元慶四年五月廿八日これ業平が終焉の日なり、乃ち五月廿八日は業平忌を營むべきの時なり。

一、卷末に附したる伊勢物語評話は曾て東京新詩社の諸氏が同書に就ての新研究なり、今拙著を飾るに此好文字を以てす。著者の欣喜たとふるに物なきなり。蓋しこれ新詩社の機關雜誌明星に主幹たる與謝野鐵幹氏が好意によるもの、こゝに一言を附記して其義に篤きを謝す。

一　業平が生涯に關しては未だ此小冊子を以て盡くす可らず。思ふに趣味多き此大詩才を研究するは、よしわが一生をこれに費すとも憾み無きなり。たゞ拙劣凡庸の筆、其百分が一だもうつし難きをうらみとするのみ。

明治卅四年の霜月澁谷の里にありて

著者識

詩人業平目次

口絵……河合英忠
序辭……與謝野鐵幹
序辭……水村鷹太郎
業平の一生……一頁
北の蔭波……染殿の后……在原氏(上下)……位爭ひ(上下)……
梅さく殿……露の白玉……東下り、都鳥……みちのおく、水無瀬殿……はゝその露……小野宮……大原詣……加茂の岩本。
業平とバイロン……四十六頁
業平の歌……五十頁
業平の愛……五十九頁
小町に逢はざりし業平……六十四頁
業平の終焉……六十五頁
(附)伊勢物語評話——落合直文……與謝野鐵幹……鳳晶子……
栗島狹衣……宇治の里人……前田林外……水野蝶郎……
……不出露花等

詩人業平

一、業平の一生

(二)北の藤波

栗嶋狹衣著

若草山に春の綠の色深くして、猿澤の池には波のわや濃かなり。大佛殿の鐘の音は生者必滅の理をつたふれども、春日の神の榊葉は更に榮枯盛衰の色を示さず、藤の裏葉の風かうばしくして、今も雲の上に紫靡きけるみそ君がめぐみの時津風、枝を鳴さぬ世のありがたさなりけれ。誰れか春日の神威今日に衰へたりと謂はん、たれか望月の影の缺けたる事ありといはん。八臂の金容は蓮座に映じ、八柱の圓堂は玉稚を列ねたり。不空羂索觀世音の尊體は四大天王の立像と並び立ちて、大悲大慈の光明世に洽かりし其往昔は、桃李謂はず烟霞空しく跡を埋めて、遂に其俤を忍ぶにはかたけれども、

古さを寫す寸見鏡の、寫さばなぞかうつらざらん。大職冠の光榮は世に稀とするところ、不比等が信任は人の常に冀ふところ、人臣の榮華まことに之れを超ゆるものあらんや。鎌足は實に大逆を誅戮して大權を鞏固にし、冠服を制し位階を定め封建を革め、土豪を收め、百度を一新して功を天下に有ちたるもの、寔に並びなき良相にして、天智帝輔佐の大任の如きは世にこれを目して、其義を致したるものとなせり。然るに本居内遠は曰く、

松の藤浪にいふ如く（松の藤波は伴信友の著）中臣鎌子は如何におぼしけん。世々の職にある神祇伯を否び申して政事を爲せん事をはかせらる。英雄のしわざとは謂へども已に祖先の掟に違へりさて孝德天皇に志を運びて食言せじといひたてゝ之を帝位に即けまゐらせ、内心には猶此帝を卓越の量にあらずと見て、我志をのぶるに足らずと、再び天智帝の皇子にまし〳〵しに志を運びて、又之を計り、うはべを繕ひて齊明帝を立て、天智帝に攝政を司どらせ、かくして後遂に天智の朝に至りて、十分に我志をのべらる。二帝の寵妃の懷孕をたまはりながら、初めの孝德天皇の妃の腹の子は、僧となしたるも、いかなる心ならん。甚だ覺束なし。是迄の所凡べて俗にいふ山師といはんのみ、不忠の志はあらざめれど、皇國の神の掟には叶ふべからず。されども一世の豪雄たる勢は失ふ可らず（和歌の浦鶴）

嗚呼鎌足を目して山師と爲す。大職冠は實に山師ある乎。うれ鎌足は君子人に非らず、異竟非凡の英傑なるのみ。而も又其子不比等に至りては史家又論あり。

林通春曰く文武淡海公の長女を娶て聖武を生む、聖武も亦淡海公の女を娶る、淡海公の文武聖武に於けるは猶事代主の神の神武綏靖に於けるが如し（中略）彼の不比等は律令を制定して諸州に頒つ、後世之を推して大臣の隆盛と爲す。然れども二帝に娶はせしむるはこれ獨り何ぞや、嫌疑なきこと能はざるか（羅山文集）

羅山がこゝに一大疑問を提起して、其行爲をとがめ、又『和歌の浦鶴』の作者本居内遠は律令の制定者として其令に背きたるの失態を責めたり、實に不比等が女を天皇にすゝめ奉り、自ら立法者として更らに立法違背者の責を負ひたるもの、實に父鎌足の非凡をうけて子に此の不比等ありといふべく、たゞ這般の消息は「彼が政治家たりしに

よれるものゝみ」との解釋を以てするの外なかるべき歟。

不比等其子五人あり。武智麿、房前宇合、麻呂、宮子媛、安宿媛、これなり。宮子媛は文武の皇后にして聖武の母、安宿媛は聖武の皇后にして孝鎌の母なり。武智麻呂、宇合、麻呂は又南家式家京家の祖にして、房前の大臣は實に北家の祖、百世榮華を極めたる藤原本家の創業者たりしなり。

房前北家の祖として其子六人あり、鳥養、永手、眞楯、清河、魚名、なほ一人の女子は聖武帝が夫人とは知らるれども其名詳ならず、眞楯の子內麻呂其子冬嗣、これ實に北家藤原氏が元勳にして、百代の偉業はこゝに基を固くしたるものなり、かつて天平九年にあたりて赤斑瘡流行の大厄ありき、而して武智麻呂房前宇合の三卿みなこれに斃され麻呂の卿は東夷征伐の軍中に於て、これは干戈の爲に斃れたり、孝謙の朝に至りては仲麻呂の惡逆廣嗣の忠誠ありて藤氏忠奸の兩名を負ひしが、かの永手、眞楯、清河、魚名、等のいづるに及び武智麻呂が子に豐成、巨勢麻呂等あり、宇合の子に良繼、百川、藏下麻呂等あり、麻呂の子に濱成あり、一家門葉漸くひろごりて、よく英主輔翼の忠誠をあげにき。冬嗣に至りては鎌足、不比等が志を襲ぎし者、器局溫雅、材幹人に越えたり、延曆の末に左兵衛尉に任せられ尋で春宮の亮となり、弘仁の初め藏人頭にのぼり歷進して正二位右大臣となる、天長の頃意見三條を上りて大に時政を論ずるところあり、左大臣に進み天長三年を以て薨す世に閑院の大臣といふ、曾て勅を奉じて弘仁格式及び內裏式を修む、又國史編纂の觀修者たり、勢望世に高く同族一時に繁榮す、又其女順子を納れて道康親王をうませ奉り、外戚の權こゝに於てか確立せり、北家繁昌の基は誠に此人の力なり、冬嗣曾て施藥院を設けて親族貧婁の病者を醫療し勸學院を興して宗家子弟の敎育をあづかれり、しかも興福寺の南圓堂をたつるに及んでは、千載の興運、神明佛陀も又これを衛護ましましたるものか、初め冬嗣藤氏の衰へぬることを氣づかひ弘法大師と申し合せて、こゝに弘仁四年を以て圓堂を興福寺にたて、觀音四天王の尊像を安置して大に祈願をこめられたりしが、此時春日明神一箇の翁と化し來りてうたひ給ひけらく、

普陀落の南の岸に堂たてゝ

今ぞさかえん北のふぢなみ

春日明神は天之兒屋根命にして實に藤氏の氏神なり、これより北家藤原氏の勢力世を歴して、正に昇日の勢ひを呈したりとぞ、あゝ神威灼然佛護れろそかならざるものか、否神威いやちこなるにあらず、佛護あらたかなるにあらず、神を陵かし佛をたぶらかす人の賢才によるもの、神威佛光は怖る可きにあらずして、人權の威力まことに怖るべきものあるのみ、こゝに於てか北家勃興の力は觀世音の神通力にあらず、四大天王の大威力にあらず、春日明神の稜威にあらずして、一箇才幹の好丈夫冬嗣其人の力なる事を知らん。

（二）染殿の后

年ふればよはひは老いぬしかはれど
花をしみればものおもひもなし

春ふかき大宮のうちは落花庭前にしきりにして、日は高欄の朱碧にかゞやき、局々の女房は衣のすゝのいろ〳〵を小簾の外にこぼして、公達が心執着るに任せたり、朝に黄鳥の聲の艶なるを貴び、夕に彩霞の色の濃なるを喜ぶ、此宮の御内には、徒に月をかけて君主を待つの恨なく、斜に雲和を抱いて昭陽を望むの悲みなく、芙蓉の帳あたゝかにして曉をだにおぼえ給はぬ御寵は、げに飛燕楊妃もおもてぶせなるけはひなりかし。こゝに染殿の后ときこえしは、閑院の大臣冬嗣が子染殿の大臣良房の女明子とて、文德天皇が御后の宮なり、父良房が太政大臣の顯職を賜はりて人臣の極位に列したる者はうもこれ何の力ぞや、良房元來第二子なりしといへども、嵯峨の拔擢を蒙りて皇女源潔姫に尙し、仁明帝に奉仕して功勳あり、遂に其女明子を納れ奉るに及びては其勢あたる可らざるのみならず、一家一門の礎いよ〳〵確然として定まるものといふべし、然るに文德天皇在位九年聖算三十二にましましてかくれさせ給ひければ、皇太子惟仁親王立つて大統を嗣ぎ給ひ、良房外祖を以て攝政仕る、攝政の制は實にこゝに基をひらき藤氏が皇室の柱石となりしも全くこゝに根ざしをするぬ、さればよ、染殿の御后帝寵の重きを得て大宮ふかく仕へ奉りける頃、父大臣の得意はたとふるにものなく、一年春の盛なるに、后の宮が大前に、櫻の花の咲きみだれたるを、花瓶にさ

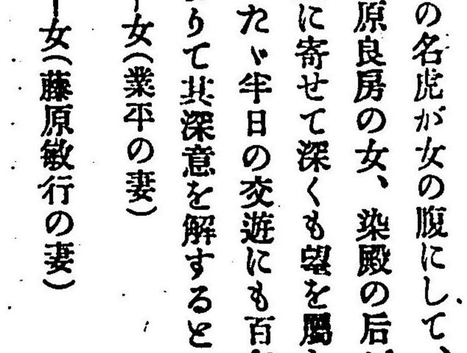
ゝれけるがありけるをみて、とりあへず「花をし見れば」とうたひいで給ひにけり。花とは櫻の艶なるによせたるか、花瓶の花げに色あり匂ひあり、宮の内風なくして春長にのどかなれば、此花いかで散ることあらんや。良房の見し物おもひなしといひけむ、さもありなんかし、しかれども無心の花遂に有情の花に如かず、染殿の后が御裝ひなどかは花におくれんや、良房の「物おもひなき」はまことはこれが爲めのみ。直衣の袖をはらつて階前にいでたまへば、風靜に木の間をわたりて、紛々たる落花は颯と小簾のひまより散り入りぬ、此ところの光景おもへば繪にも似たりといふべし。かくて惟仁の宮の清和天皇とて立ちたまふに及びては貞觀六年二月廿五日を以て良房が染殿の第に行幸あり、時しも櫻の盛なりければすなはち醼を設けて觀櫻の樂みをつくし給ふ、いはんや此殿は天皇が御產聲をあげさせ給ひづるところなるをやいかばかり大御心におつかしとはおぼしめしけん。文武の百官は堂に充ちて肴醴山海の如く、祿物は庭上につまれて寶の山に入りしが如くなり、主上花亭の高欄近う高御座をすゝめ給へば、月卿雲客は袖をつらねて左右に居流れたり、折から樂人の吹きなす笛は風に和し霞に咽びて、驅々として天人が霓裳を舞ひ羽衣を翻すが如くなるに、流石に情ありける平安宮人達は聲をひそめ襟を正うして侍ひけるこそたふとき御世のめぐみなりしか。樂はて、射場殿にいでさせらる、主上御手づから弓をとらせ賜ひて一發にして鵠に命中たまふ、群臣聲を合せて萬歳をとなへ奉れり、これより親王以下の臣庶を追ひて射る、儀了て山城守紀朝臣今守等が郡司の百姓を率ひて耕田の禮を行ふを御覽せらる、これ良房が幼主をして農事の至難を知らせ奉る心しらひなりとぞ、晨より暮に至り暮に至つてなほ樂みつきず、朧々の月樹間にほのめくに及びて漸く宴を撤したまふ。後貞觀八年三月を以て又染殿の行幸ありこたびは詩人をあつめさせ給ひて百花亭の賦を奉らす、治まれる世の御すさびめでたしといふもおろかなるべし。嗚呼藤原氏の權、寔に天地に度る、たれかこれに抗せずして可ならんや、在原氏の奮起は自然の勢なり、清和天皇即位の大禮は實に在原藤原の勝敗を定めたるもの、二條の后を納れ奉るに及んでは、遂に在原氏の力如何ともすること能はず、たゞ業平朝臣が非常手段に終るには至りぬ故に以上の論はこれ在原氏をれこすべき序說たるに過ぎざるのみ

(三)　在原氏(上)

大寶令の制によれば猶諸皇子のみにあらず、二世より以下五世の孫に至る迄は、皆皇親の列にありて王と稱し品位を授けられ、往々にして政治の機務に與かり、而して封戸を賜はりて調度にあてられたるを、桓武帝始めて皇子の生母賤しきものを、皇親より下して臣下の列に加へ、之に長岡良峯の姓を賜りしより以來、代々の天皇其制に倣はせ給ひて、皇親にも臣姓を賜はる事にはなしぬ。皇親姓を賜はりて臣下の列に入る時は初め六位に叙し、京都又は地方に於て六位相當の官職に任ぜられ、才能によりて考課を經て昇進する事、一般の朝臣と異ならず。然れども自から威權ありて、嶄然群臣中に勢力を得たる事は、掩ふべからざる事實なりき。

在原氏は平城天皇の皇子阿保親王の諸子に賜はりし臣姓にして、業平朝臣は淳和天皇天長年中を以て兄行平と共に此姓を賜はりしものなり。而して朝臣(あそん)は親王が第五子母を伊登内親王といふ。世に在五の君又は在五中將と稱へたる事は、これ業平が第五子にして、其職曾て右近衛權中將たりしによるものなり。貞觀中右馬權頭に任ぜられ勅を奉じて鴻臚館に渤海國の使人を接待せり。素より容貌閑雅才幹人にすぐれたりしかば當時の外交官として寔に適任なりしものならん。後昇りて中將となり、元慶年中に至りて相摸及美濃權守に任ぜられ、同じき歳の四年五月、五十六才を以て卒せられたり。二子あり、棟梁(むねやな)といひ滋春といふ。共に文才に秀でたるもの、古今の歌卷にも其名多くあらはれたり。

時に文德帝に四皇子あり、長を惟喬といひ、次を惟條といひ、三を惟彦といひ、四を惟仁といふ。惟喬及び惟條は共に紀の名虎が女の腹にして、惟彦は滋野貞主が女の腹なり。而して第四皇子惟仁は實に藤原良房の女、染殿の后が腹におはしけるなり。業平素より惟喬と交りてよし、心を之に寄せて深くも望を屬し奉りき。嗚呼これ全く業平が才氣と親王が才氣と投合して、たゞ半日の交遊にも百年の知者たるを契りしのみにもあらざるべし。今左の系圖によりて其深意を解するところあらん。



こゝに於てこれを見れば、惟喬の母静子と業平の妻とは姨姪の血縁あり、業平當時の心中豈たゞ交遊を以てするの直情のみならんや。然れども惟喬惟仁の位爭ひは遂に勝を藤氏に奪はれて、業平が胸裏平穩なる事能はず、決然として意を定めて爲すところあらんとするに當り、藤氏は更に第二の策を盡して其根底を固うせんとしたりき、第二の畫策とは何ぞや、曰く良房の婚姻政略これなり。良房おのれに女子なきを思ひ、兄長良が女高子を養ひ、之を以て惟仁親王に納れ、益々外威の大權を收めんと企てぬ。業平いかでか默止せんや。遂に非常手段とも稱すべき姦淫の皮肉策を講じ、裏面より藤氏が企圖を蹂躙せんと計りぬ。乃ち色を以て高子を誘ひ遂に缺隙を鑽りて慇懃を通ずるに至れり。藤氏大に狼狽し高子を染殿が后の室中に隱して戀の通路を斷ち、八方彌縫して企圖を完せんとしたりしが、業平遺憾措く能はず、夜に紛れて又これを誘ひ共に逃走せんと企てたるは、正しく最後の手段たりしに違はざりしなり。されども中途より奪ひ返されて事全く成らず、却て藤氏が恨みと怒とを殘して悄然として東國に下るの悲境に陷り、後年都にかへり來たりしも官途澁滯、世に一人の知音を得ずして渣焉として他界の人とはなりぬ。悲しいかな烈夫身を汚して志を行ひ、名利を捨てゝ大業を興さんとしたるに、天運廻らず徒らに嫋首と目せられて惡名長に嘖々たり。世にいはずや、業平の歌は心餘りて詞足らずと、當年の業平いかでか滿腔の熱情なかるべき。僅々三十一文字の短詩、能く綿々の情致をあらはし盡さん、詞足らざるも心餘れるも、共に業平が狂熱至誠證すべきの評言なるのみ。

（四）　在原氏（下）

平安の都は山紫にして水明かなり、大造東西にわたりて風塵をあげず區域南北を劃して能く郭を爲せり。春は花の大堰川、秋は月の嵯峨の奥、眺望まことに四季の景に富みて地勢また都市の觀を完うせり。されば當時花鳥の使を馳せて愛慕の心を告げ、垣に乘りて復關を望むもの、握手禁せず、眈目して謹なかりしものは、思ふにこれ自然の習尚の然らしむるところ敢へて怪むに足らざるなり。朝に儿帳の下にして移香のきのふを忍び、夕に高欄の下にいでゝ忘れ扇に昨夕を氣遣ひたるもの、大臣といはず大將といはず。かしこき竹園生の御末に列なるべき御身にして、猶且つ此群に泄れざ

りしも已むを得ざりし事ならん歟。浪速の學者尾崎雅嘉は曰く

行平業平兄弟にて歌よみの名は兄の行平よりも、まさりたれども其行狀は雲泥のたがひなり。兄の行平は經濟の才ありて國家の益ある事を考へてもとより心正かりし人なり。弟の業平は體貌閑麗とて、姿かたちは雅なる美男なりしかど、放縱にして拘らず。身持我儘にして物にかゝはらず、國家を治むべき才學なくして和歌をのみよく詠まれたる由、三代實錄にもしるされたり。（中略）中にも伊勢の齋宮の御事二條后の御事などは實事にてもありけんかしさやうの過ありければこそ正しき王孫ながら官位の昇進もはかゞしからざりけれ

然りといへども此にいふ淫逸蕩野の批難は服部南郭が說を以てやぶる事を得べし

其世を見れば唯だ荒淫これ競ひ一時貴遊の子弟は瑤垣に乘りて後關を望むもの、手を握るも罰なく貽目して禁せざるは則習尙の然らしむればなり、乃ち其風俗を病む可なり、焉ぞ獨り左中將を責めて嫐首と目せんや夫の小野王は志を失ひて自らかくれたり。紀氏は微々たりといへども、亦世に傲りて其樂を改めざるなり。乃左中將が其際に周旋し締交欵曲終始一の如し、豈偉ならざらんや。たとひ在中將は正義に不軌なるも蓋し又多しとするに足らん、綽々然たる佳公子なり（南郭文集）

猶業平當時の心情を察したる論は、藤田東湖の言に徵すべし。

良房攝政の時に當りて志あらん。人々何ぞ患へざらん。在原業平の惟喬のみこに消息したる和歌をみても其時のさま思ひやられぬ。

豈業平徒らに嫐を求め、醜を追ふものならんや。本居內遠は曰く。

此時切齒せし人多かるべけれど、權に恐れていふもの無かりしは道鏡が專權の後の大患といふべし。ひとり業平朝臣のみ放縱不拘にして、一世を蔑弄してすごされしは卓越の見なれども、威權なきに依て計を施すべきところなし（和歌の浦鶴）

高田與淸又曰く

伊勢物語は業平が世をうき物におもひける頃、此冊子を書て憤をはらしけるなり

伊勢物語の作者たるや否やは別に學者の考證あればこゝに定めがたし、たゞ業平を辨護したる說はおほかた斯の如く、これを攻擊したる諸家の說は淫蕩放逸を難じたるの

聲なりき。但し業平が優々たる遊子の徒にわらざる事は、明なる事實なれども、其兄行平の識に及ばずとの説は、愚論なり。天才としての業平、文學者としての業平、殊に詩人としての業平は、更に最後に於てわが論せんと欲するところ、今はたゞ業平が政治界に雄飛したる一世の大丈夫として、其大班を記述するに過ぎざるのみ。

(五)　位爭ひ(上)

大枝を超えて、奔り越て、騰りおぢり越えて、
わがまもる田にや、捜しあぢざるはも

苟且たる童謠ながら此頃の都大路よは斯る不思議の聲々を聞かぬ日とてはわらざりき。世の人眉をひそめ思を沈めて奇異の感を抱きけるに、果然天下の耳目をおどろかすべき御位あらそひの椿事は起りぬ。初め文德天皇一宮惟喬親王の才幹を愛し、御心をこれに寄せられけれども、素より紀氏の出にして外戚まことに頼み難し。況んや藤氏の威勢當る可らざるものあるに於てをや。時に承平元年九月四日の夕、參議藤原實頼染殿の大臣良房の許へまかりて、天皇の志第一の皇子におはします事を語りければ大臣良房いたくこれを患ひ、惟喬辭讓の策をめぐらさんとしたりしに、天皇も又其氣色を窺ひて遂に事を決し給はざりき。時に藤原三仁といふものあり、天文を能くして其名世に聞えしが、良房にむかひて謂ひけるは、懸象更に異變なし、天皇の御志は遂げさせ給ふ事あるべからずと、其言寔に神の如くにてありき。然るに天皇は左大臣源信朝臣を召して、惟喬に讓位の御心を泄したまひけるは、惟仁幼年にして未だ萬機を總ぶるに難かるべし、しばらく天下をあげて惟喬に讓り、惟仁成年の時を待つて更に讓位するところあらしめんと、信朝臣詞をおごそかにし姿を整へて答へまつりて曰く、惟仁親王成年の後にありて讓位をうけさせたまはん事、理ありとも覺え候はず。惟喬の皇子非無し、何よ依てか大御位を黜け奉るべき、所詮聖意を遂げさせたまふべくもわらず、却て禍根をのこさんのみと、天皇御氣色甚あしく、失意のうらみ堪へ難くおはしましつれど、また如何とも爲し給ふ事能はず、空しく望みを永世に抱かせ給ひて、遂に崩御ましましければ、大御位は第四の皇子惟仁親王、藤氏の出を以て嗣ぎたまふには至れるにぞ。さてころは怪しき童謠の早くより世には聞えてありしなりけれ。「超て奔り

超て腐り跳り越て」といふ三超の心は、誠に御兄弟の三皇子を越えて、四宮即位の偶意をこめたりしものなり。嗚呼雲の色に依て風雨の來らん事を察し、蜘蛛の振舞に依て懸しき人の訪はん事を知る。物に前兆ありといふも強ちに痴者の言とすべけんや。天の意は人の言をして初めて世を警む。蓋し大勢の然らしむるところありて存すればなり敢て怪むに足らざるべし。

然りといへども當時惟喬親王の御方なりし紀氏に至りては其失望甚だしく、業平の苦心もまたたとふるに物なく、悵然として怨み、慨然として嘆じ、天の此族に薄きを恨んで、みだりに慷慨するに過ぎざりき。

（六）位爭ひ（下）

惟喬惟仁の君かたみに力をつくすべき後見のありければころ、爭ひがましき事は起りたれ。天皇も分る御方なくおぼしめしたまひければ、叡慮まことに定めがたくして、遂に勝負に賭して運命をきはめ給ふべき御仰せあり、まづ右近の馬場にて競馬十番の勝負を催し、後角力一番の催しにて何れへか御大位は譲りたまふべきなりとぞ、されば惟喬方の紀氏は東寺柿本の眞濟僧正といふ大德をして、勝利の御祈をかけさせらる、此僧正は德行世にきこえて、しかも天皇御信任の高僧なり。惟仁方の藤氏は延暦寺の惠亮和尚といふ大師をして、勝利の御祈をかけさせらる、此和尚は薫修日に新にして、忠仁公が蹄結の僧侶なり。かくて眞濟僧正は東寺に壇を設けて降三世明王の修法を行ひ、惠亮和尚は西塔なる寶幢院に壇を設けて大威德明王の修法を行ひたり。やがて競馬の當日に至りけるが、各々精をつくして爭ひけるに、初めの四番は惟喬方の勝となり、後の六番は惟仁方の勝となりて、これは藤氏の利に歸しぬ。さて次は相撲の儀なり、惟喬方よりは祖父の紀名虎當時の大力ときこえたるが、恩愛の義理にひかれて當日の撰手にはあらはれたり、惟仁方よりは能雄少將とて、きはめて小兵なるが立ち向ひぬ、たれも名虎の力無双なることを知りけるに、小兵の能雄いかでか敵んやと危み合ひしをこるたは時運の定め、人の左右するところにあらずとて、怖れもなさで立ちあらはれし事、大膽不敵の男なるよと口々にいひあへりぬ。やがてすまひける程に、大力の爭ひわざかも金剛力士の相搏つが如くなりしが、能雄の力素より名虎に及ぶべくもあ

らざりければ、しば〳〵危く見えける程に、御母染殿の后、いたく心をいためて使を山門にたて其急を告げたりしにぞ、惠亮和尙奮然として憤を發し、爐壇の利劍をとつて自ら頭を突きやぶり、腦漿を取つて芥子に和し、炎々たる猛火のまったゞ中に投げ入れて、歸命頂禮大聖大威德明王の御名をよばひ、もみ上げ〳〵祈り入りけるに、不思議や大威德明王が乘御の水牛、角をふりたて〻一聲高く叫びけるにぞ、忽ち土俵なりける名虎が力摧けて、能雄がために投げられにけり。眞濟僧正も力を碎きけれども降三世が威力大威德が不思議の力に及ばで遂に負をとりし事、遺憾極みなかるべし。名虎勝負にひけをとりしかば、位は惟仁の皇子につけられて、藤原氏は大權を收むるに至りぬ。紀氏一家が心を落しぬるも理なり。蓋しこの事愚說にしてとるに足らざれども、又以て兩氏が苦心の程も察せらるべく、當時の形勢もかくこそとはおもひやらるゝなりけれ。

永井定宗曰、親王(淸和)生而僅九月立爲太子、當此時惟喬旣四歲固宜立矣而立惟仁者以其爲攝政良房之外孫故也、天皇雖欲立惟喬豈能得乎而釋師錬謂二皇子爭儲位帝令鬪藝勝者得位乃賭競馬相撲惟喬有力士名虎惟仁有力士善雄名虎膂力甚强惟仁使僧惠亮祈善雄乃得勝於是惟仁立爲儲位行長之記亦載此事然名虎之死已在惟仁不生之前則其虛誕可知唯是浮屠夸說其祈禱而人人吹虛傳訛耳豈足信哉、(本朝通紀)

釋師錬が說とは元享釋書をいふか、行長之記とは平家物語をいふか、位爭ひに關する名虎善雄の角力の事は本朝通紀の作者の言を待たずとも、信ずるに足らざる事は勿論なり、又僧侶が宗敎心を買はんが爲めに附會せし說なる事も明白なり、大鏡には「惟喬のこの東宮爭ひしたまへりけむもこの事とこそおぼゆれ」とありて更に附會の說なし、而して力士となりし名虎は仁明天皇の承和四年に卒去したる人なれば、此時殆んど十年以前の人なり、いかで、かゝる振舞のあるべき理あらんや、しかれども紀氏藤氏互に僧を召して祈禱こと〴〵しくとりおこなはせたるは事實なる可し、これ當時佛敎最盛の時なりしのみならず、かゝる事に神佛の力を賴む事、人情の常なるべければ、東寺の僧と山門の僧と、共に祈禱師の任務を豪りたるは疑ふべきにあらざるべし、大日本史の贊藪にいはずや。

使帝有明斷則不畏良房之權立親王以從長子守器之義不然速正藤原氏之位號以明嫡庶之分不由此道而優柔不斷既立之欲易之此殆啓釁端也豈不危哉幸而帝納源信之諫國本不動搖此社稷之福也

皇統の正しきよりいはゞ吾人は却て藤原氏の出をむかへん、藤氏は天之兒屋根命よりいでゝ神胤爭ふ可らず。紀氏又彦太忍信命が裔をうけたれば明かに皇胤たり、しかれども二氏漸く年をふりて、王臣の別、將になかるべからず、此時にあたり藤氏が祖不比等公は鎌足が子にあらずして、まさしく天智帝が御落胤たり。其系をひける北家藤原氏が腹の皇子、いかでか皇統の正からざるものといはん、此點に於ては紀氏一歩を輸したりといふべし。贊藪の說はたゞ支那道德を根據とせるもの、皇統の上にありては惟喬惟仁兩皇子の何れをか選び奉るべき。長を以て惟喬に讓らるゝもよかるべく、系を以て惟仁を立らるゝもよかるべきなり、國家の上には更に輕重もなく國權の上には毫も伸縮なし、只其後見たる紀藤兩氏が勢力には、此上なき大影響あるべし、要するに兩氏が權力の爭ひなるを以て、惟仁立たば藤氏が勢力は、又昔日の如くならず、世人のこれを

歎々するものは、藤氏の專横を氣遣ふを以てなり、紀氏の失敗は已むを得ざれども、才幹ある惟喬親王の失意と、好丈夫業平の落膽とは、憐むに餘りありといふべし。若し運を換へて惟喬位に即かば、在五中將は奚ぞ一箇佳公子にして止らむや、上に賢才の君あり下に閑雅の輔佐あり、又以て一代の美風を呈せしならんに、惜いかな一敗地に墜ちて、又拾收すべからず、吾人はたゞ業平のために惜むのみ。

贊藪に又いふ、信の大臣の忠誠に依て國家安堵と、愚なるかな言や、信は藤氏が御味方黨の一人のみ、惟喬の即位を周旋せざりしものは、藤氏の愛顧をおもへばなり、何ぞ忠誠の烈夫ならん、當時に於てあれ程の言論を吐く、奚ぞ至難の事なるべき、諫言に類して諫言にあらず、行爲たま〳〵誠意に出でたるに似たりと雖も、眞情を碎かば、憐むべし一片の私慾によるものなる事を。

(七)　梅さく殿

ねや近き梅の匂ひに朝な〳〵、戀しくおもひ出らるゝも、とわりなるものを、まして昔見し人のすみかは變りはてゝ、花のみ主顔なるに、月くまもなくさし入りたる夜の風

情は、われ有情の人を傷ましむること幾何ぞや、疎影横斜月三更の空にして、花の露風なきにおちんとする時、誰ぞや五條の大后が西の對屋に忍び入りて、あばらなる板敷に、直衣の袖のしほるゝまで、うち靡きてひそみゐし人は。假令黄鶴樓中に玉笛の音をきかずとも、何方にか人の俤の見えざるを悲まざらん。立ちてみゐてみ、おもひを碎けども、更に去年に似るべくもあらず、むつきの夜半の又冴えかへるにも厭はで、月のかたむくまでたゝずみつ、

月やあらぬ春やむかしの春あらぬ
わが身ひとつはもとの身にして

とかなしき聲に謠ひ了りて、ほの〳〵あくる夜のいろに紛れて、たどりかへられける男こそ、擬ふ方なき業平なりけれ。好色〳〵しきすさみに、一夜丸寢の涙にくれて、うらみわびてはかへりしものか、伊勢物語にいふ

昔東の五條に大后の宮におはしましける西の對に住む人ありけり、これを本意にはあらで志深かりける人行きとぶらひけるを正月の十日許の程に外にかくれにけり

本意なくて通ひける心のおくに、何事か深き秘事のひそむ事なからんや、良房の大臣、志の如く、惟仁親王を位よ即け奉り、外戚の權によりて勢ひ日に募りけるが、猶そのもとゐをかためんとて、女子入内の儀をはからひぬ、されどもおのれに女のなかりければ、兄長良が女高子を養ひて、やがて志の程を貫かんと企てたり、業平これを知りて憂ふること一方ならず、今もし藤氏が女入内して、又皇子をうませたまひなば、政權ひよ〳〵彼れに歸して、施すに術なからん、しかれども今に及びては劃策みな外れて、そを敗るの企圖もなし、よしさらばおのれが身を抛ち、此難局にあたらんにはと、てこに高子が、御姨五條后が宮中に養はれけるに近づき、色を以て誘ひしに、元來淫逸なる高子は、業平が容色に謀られて、遂にわりなき中とはなつたりき。業平已にわが術中に陷りたるを知り、力てこれを惑溺して、遂に惡名の世に憚らざるを希ひぬ。かゝる程に藤氏の一門これを知りて、大に驚き、掌中の名玉に大瑕を負はせられたるが如く、狼狽一方ならずして、直に高子を染殿の后が御方にかくまひぬ、業平この妨害にあひて、又策の施すべきものあかりしが、かの正月十日の夜にあたりては、曾て

なれうめたりし五條の宮の西の對屋にいたりて、失意の極み聲をもらして泣きかなしみ、月やあらぬとうたひては、世の果敢さを歎じたり、されども人のなさけに厚き、いかでか又戀慕の情なからん、業平が舊懷の涙は、一は畫策の失敗にいでたりといへども、又愛悼の和して流るゝものなからんや、梅さく殿の夜半の月、ひとりたゝずみて泣きし男の、萬感胸にあつまりきたれるを察せば、たれか又同情の涙なきものぞ

（八）露の白玉

業平が企圖は遂に成らずなりにけれども、剛毅の人いかでか撓むところあらん、如何にもして高子が入内を妨げ、藤原氏が計畫を鼻あかせんとおもひければ、染殿の后が方にかくされたれども、かはらぬ昔の音信を通せんとて、百方くるしみける末、やうやくに隙を得て忍び入り、さまゞに說きすすめて、遂に携へて走らんとぞ企てける、夜のくらきに紛れて都をいで、芥河のほとりまでひた走りに走りつきしが、空合あやしくなりゆきて、風さわがしくふき起り、雨のあしよこざまにあたりきて、神さへおぞろ〳〵しくなりはためきぬ、みちはくらし、夜はふけたり、女をたづさへて心も一方ならずさわぎければ、しばしがほどとて、とある家のぬりごめの中に忍び入りつ、高子をいたはりて、奥の方ふかくかくまひおき、追手やきたると、おのれは戸口の方に佇み、弓胡籙とり負ひ、藤氏が奴原の妨げにきたるものあらば、美事射たふして耻見せんとかまへたり、折から電光ひまなくひらめき、神おちぬ許りになりわたるに、大宮育ちの馴ぬところに、此うきめ見んずる事のつらくて、高子はおのゝきて泣きいでぬ、かゝる程に良房が子の國經基經等は、高子の所在を失ひければ、驚き騷ぎて急を告げ、いそぎ人をかりあつめて、其あとを追ひ行きしが、かのぬりごめのあたりにて女の泣聲のしきりなるに怪しみ、さてこうとてうち入りしに、高子の潛みて泣き居たりしにぞ、直にうち具してたちかへりぬ、業平心は猛くおゝひけれども、多勢にへだてられて志再びにやぶれぬ、足ずりしてなきかなし　けるも、憐れならずや。

白玉か何ぞと人のとひしとき
　つゆとこたへてけなましものを

とはあはれ何等の悲吟ぞや、高子業平と共に、彼の道芝の露とけなましかば、藤氏が

計畫も遂に水泡のみ、業平一歩をあやまりて、其最後の術を潔うするに後れたりし事、實に遺憾骨髓にも徹せしならん。當時業平の年三十四高子の年十七なり、いかに平安の風俗亂れたりといへども、業平齡不惑に近くして此痴態を演ずる事、聊か思ふ處なくて可ならん。

（九）東下り、都鳥

業平が東下りの事につきては、古來信疑ともく說ありて、定め難きに似たりといへども、已にこれ古今集にもあらはれ、例の物語にもかくれなく、大日本史も又これに從ひて其が東下りの一條を加へおきたるを見れば、强ちに荒誕なりともいふべからず、業平藤原氏に憎まれて、世に恃むところなくなりしが、藤氏は最愛の高子を疵けられて怨恨やむかたなく、若し普通のともがらなんには、重き勘勅をも蒙らすべきなれど、流石に王孫のやむごとなきを憚り、たゞ斬髮の刑に處したりき。業平事みな成らずして此恥かしき刑を受け、いかでか京中に彷徨することを好まん（以上古事談の說による）決然歌枕をみんと稱へて、關東へ下向することゝなりぬ、これ素より官命にあらず、又見苦しき姿を掩はんとする、かりそめ事のみにもあらず、必ず大に期するところありしならん。萩野由之氏云

古より有志の士の事をあげんとするものゝ、先志す地方は必ず東國に於てす、ふるくは大海人皇子における平城上皇の復祚を計らせたまへる時に於けるが如く、これより後には爲義義朝が保元平治の敗後に於けるが如く、みな目ざす所を同じくす、在五中將の東國に入るもの、豈これらと同じく關東人の勇悍を糾合して、はかるところあらんの希望にてはあらざりしか

猶業平が、歌枕多き西國に向はずして、東國に向ひたる事、甚だ前說を强うするに足るべく、又岳父紀有常が甲斐尾張の守たりしを以て、當時もし尾張の守たりしものならば、必ずまづ之によらんと思ひしならんも、三代實錄によるに、元慶元年には有常肥後の權守たりしを見れば、さもあらざらんかなといはれたり。面白き考へならずや。

兎まれ角まれ東下りの傳說は事實とすべし。業平京を發して道を三河に取り、八橋のくもでなす河水にやつれたる姿をうつして、燕子花の艶なるに人を戀ひ、やがて駿

河の國にいたりて、宇津の山路の心細きに、蔦楓の葉さへ茂りて物いぶせく、凄涼なる目を見る事と思ふに、修行者とみちに逢ひて、ゆくりなくも京へたよりのたつきを得、うつゝにも夢にもわはぬ人の身を氣遣ひては、潸然として涙にくれたり「京にうの人の許にとて文かきてつく」とはるも誰がもとにか、妻がもとにか、高子がもとにか、はた又惟喬の皇子がもとにか、彼の神州清麗の氣凝つて一朶の芙蓉峯となり、萬古の雪皚々として、東海の天にかゝやくの姿をながめみては、嗚呼詩情あつき業平にして、いかでか千古の好吟をもらさゞらんや、乃ち謠て曰く

時しらぬ山はふじのねいつとてか
鹿子まだらに雪のふるらん。

武藏と下總との中にあずだ川あり在五中將のいざこととはんと詠みける渡なり中將の集には隅田川とあり（更科日記）

更科日記の作者は中將の世を去る事、はるかに二百年の後なれとも、猶中將が昔がたりは口碑に傳り、頗る著名の詩話なりしを證明せり。滔々として北より南する水の、兩岸の砂磧夕陽に映じて、蘆葦の風悲み、富士筑波かたみに此水を鏡にして、中空に姿をつくらふが如く、炊烟轉た稀にして、旅客渡頭にさびしげなりしうの往昔は、縹茫として今は其俤をも忍ぶに難からん。日は將にくれんとするに、波ふなばたを叩くと急にして、渡守が促す聲も頻なるにぞ、人は爭ひてみな乘合ひをいろぎたる中に、狩衣のくゝり緒いたくなえはてゝ、奴袴の色もやつれたる人の、風折の烏帽子色さびて、みるめはいと傷はしげなれど、流石に氣高き姿は、高貴なる人の忍びわざかとも おもはるゝに、供人もあまたは具せず、舟の中にひそみておはしたるが、水にたはむるゝ都鳥のみやびあるを見て

名にしおはゝいざことはん都鳥
我思ふ人はありやなしやと

しとやかにうち詫ちいで給ひければ、舟なる人はこぞりてめで合へるに、波洋々として水天相連るが如き江上に漕ぎいでける時、御供なるを顧て、あはれ遠くも來にけるかな、京に想ふ人なきにもあらずと、悄然として袖をしぼりて立ち給ひぬ、あゝ誰れ

か知らん此可憐の公達を、京に其人ありときこえたる在原の朝臣業平ならんとは、

（十）　みちの奥、水無瀬殿

昔男の物語は、不倫の書ありとて道學者の斥くる處となりしかば、たゞかの豆男が、仇ある語艸のみ世にしげくなりゆきて、色めく人の張本と崇められしも、非凡の史家一たび世に卓絶の說を立てゝ、赤誠の實を證してより、今はなか〳〵に彼の文さへ眞實（まこと）しき物のたよりとはなりぬ。されば、その中の事ぐさを、苟且（かりそめ）にも朝臣が御身の事柄にひきよすれば、一として、すてがたき事のみぞいで來なる。

陸奥國にすゞろに往き至りにけり、そこなる女、京の人はめづらかにやおぼえけん、切におもへる心なんありける（伊勢物語十四段）

かゝる事を以て猶朝臣が東下りのついでに、陸奥（みちのく）地方迄赴きたるものとなさば、更に趣味ある事柄ならずや。

男京へなん往ぬるとて

栗原のあねはのまつの人ならば、

みやこのつとにいざと謂はましを

かゝる事を以て朝臣が陸奥より京へ向へる時の事柄となさば、まことに趣味深き事柄なりや。

在中將爲レ嫁二件后一（二條后を云ふ）出家相構其後爲二生髮一至二陸奥一向二八十島一求二小野小町之尸一（古事談）

かゝる事を以て朝臣が陸奥滯在中の事柄ありとなさば、愈々趣味深き事柄にはあらざるか。陸奥に下れるものとせば、これ東北の豪族を訪ふが爲めなるべく、力めて女に狎れたりとせばこれ例の慣用手段なり、更にいはゞ朝臣が特有の政略なり、而して「栗原のあねばの松云々」の詠を朝臣のものとせば、これ正しく意成らずして、遂に人を得ず、失望のきはみ京に皈らんとせし時の、悲吟にはあらざるか「あねはの松の人ならば」とは表にこそ狎れし女が人がましければとの意見（いみ）なれ、まことは陸奥（みちのく）に計るべき人あらば都に伴ふ我友たるべきに」と嘆じたる心にはあらざるか、古事談にいふ如く、小野の小町のなきあとを弔ひしとならば、豫て此地方にて小町の亡（うせ）してふ傳說のあるも

のから、事の序に其不遇なる才女の昔をたづねて、境遇ひとしき我身の、同情の涙を濺ぎたるにはあらざるか。伊勢物語全卷を以て業平朝臣の事のみとおもふ勿れとは、曾て先哲のいひおかれしところ、古事談の如き荒誕よるところなき書を信ずるも愚なれど、若し朝臣にしてかの地方に赴きしものとせば、時のありさまの、正しく斯の如きものありしや疑ふ可らず。蓋し朝臣が東下りの一行は、遂に其功力なかりしは確實なり、此間に於ける藤氏が居動及び惟喬親王が消息、是れ吾人のなほ語らんと欲するところ、以下これを詳にするところあらん。

業平東國よりかへりきたりて、都に入るや、藤氏は外戚の權に倚りて、家門榮華の勢をもてあろび、到底微々たる在原氏の力には、又如何ともなすこと能はざるに至りぬ、初め業平の東國に下るに及びては、斬髪の刑に加ふるに、又解官の沙汰を以てせられたるものゝ如し、うは日本後紀第十九

嘉祥二年正月丙辰朔壬戌授無位在原朝臣業平從五位下（此時業平二十五歳）

とありて早く從五位に叙せられたる人なるに、又三代實錄第六に見えたる

貞觀四年三月七日乙亥授正六位上在原朝臣業平從五位上（此時業平三十八歳）

斯くも後更に一階降りたる六位より、五位の上に叙せられたるを思へば、業平三十四歳の貞觀元年に、高子の事によりて五位の官を解かれ、京を去りて東國に下り、翌年又は翌々年歸るに及びて、更に六位に叙し、三十八歳乃貞觀四年に再び元の五位姿にかへりたる事と察せらる、其不遇おもひやるに餘りあり、後あげられて右馬頭となるも、未以て其任を得たるものには非ざるべし、時にかの惟喬親王は世をうき事にして山城乙訓郡水無瀬（みなせ）といふよ別莊を設けてこゝに籠り、ひたすら俗塵をよりにしたまへり、業平曾ても此皇子に親み奉りけるが、かく世にすてられたまひければ、一入御心を添へ奉りつゝ、かつは我身の想ひをも寄せて、かたみに慰めの友となし奉りぬ。花の盛の遊宴にも、月の前のまどゐにも、業平の侍らざる事はなかりけるが、ある時は河内國なる交野（かたの）に至りて、春を渚院（みなぎゐん）にとぶらひ、御狩なんどを催して、悠々と心を放ちたまひぬ、實にこの間の消息ころ、業平が平和なる詩人的生活を送りたる時なりけれ。

世の中にたえて櫻のなかりせば
　　はるの心はのどけからまし

何等の絶調ぞや、物徂徠が評して古今の名吟眞個の詩人と贊したるも宜なるかな、交野のほとりなる天の川といふに至りては、よすがらの月よ痛飲し、恬乎として天下の大勢をも忘れ果てたるものゝ如く、昔日の俗夢は今日の現の仙遊に洗ひ去て、當年の業平は眞に風流の一才子と化したりき、此時の彼の心や、人間界の紛々たる瑣事は、笹の葉にまろぶ露ほども心にかゝらず、宇宙の美妙に醉死して、たゞミューズが懷に暖き眠を貪らんと欲せり、いはんや大俗物の藤原氏輩の如きをや、彼は叢よすだく蟲の音程も其注意をひかざりしかり、又彌生晦日の夜、朧なる月の前に、例のむしろ設けて、業平の候ひける事ありけるが、御暇申して去なんとするに、宮さま〜のかつけものなどして、引とめ給ふにぞ、業平の心は常になくさわぎて

枕とて艸ひきむすぶこともせじ
　　秋の夜とだにたのまれなくに

とて、いざ今宵は枕に艸引むすびて寢ねんともせじ、夜長き秋の如くは恃まれぬ春の夜なれば、一刻千金の思ひをよせて、明くるまで御側にさぶらはんといひける程に、此の夜ばかりはいかにも胸さわぎしておちゐることもなりがたきを、業平が心中には如何に怪しと思ひけん、あはれ皇子の御身には障もなくて過し給ふべき歟。

（十一）　はゝそりの露

業平の量器なほ風雅の外にあらはれたることは、已に前に述べつくしぬ、されども其性行の友に篤く、親に篤かりしは、未だ叙する處あらざりき、今其至孝の心をあかして此好丈夫が心情の美を添へん。業平は行平の異母弟にして母は伊都内親王なり、長岡といふところに住はせたるに、朝臣は宮仕へのひま〜にとぶらひて、孝養をつくしたるが、貞觀三年十二月といふに、頓の事とて御文あり、驚きて披き見れば、さしたるふみの詞もなくて

老いぬればさらぬわかれのありといへば
　　いよ〜見まくほしき君かな

縷々たる輕薄の言、いかに卷を重ぬるものゝありとも誰れかこれをあはれとおもはん、片々たる切情の句、いかに詞を成ざるものゝありとも、誰れか之をあはれと思はざらん、況んや此熱誠の歌、至情の聲、詩に篤き業平をして、いかばかりか歎息の涙に暮れしめたる事ぞ、取ものもとりあへず、馬にも乘りあへずして、走りいでしが、道すがら母が身の上をおもひやり奉りては、うちなきつゝ

世の中にさらぬわかれのなくものがな
千代もとおもふ人の子のため

感きはまり情あふれて、詞自ら章をなせり、母の爲に米を負ひ、軍をかへしたる例も、唐土にはことごとしくほめ立てゝ、人のかゞみと傳へたれど、猶この至誠ありて眞情わざとあらぬこゝろありがたけれ、たれか慈母の恩愛をおもはざらんや、雨のめぐみ露のなさけ、花さく撫子のすがたを待ち得て、昔の春秋を語らんと期したるも、風心なく吹きすさみて、蔭なすはゝその木は折れぬ。業平が心に神を念じて急ぎける當時は、けかれたる世の慾望はかげをひそめて、藤氏に對する憤も、或は惟喬の皇子に對する誠も、須臾は忘れたるものゝ如く、偏にたゞ千代もと祈る心のみふかくして、此時の業平は全く母を思ひし幼き昔にかへりたるなり、天眞爛熳の昔にかへりたるなり。かくてうの家に着きて後、母なる內親王は、神佛の加護を完うして、げに千代の命をつなぎ得たりし乎。

（十二）　小野宮、大原詣、

大比叡小比叡の山は雲際にうゝびえて、西に愛宕の山と相對し、北より吹來る越路の嵐をうけては、雲を凝らし雨を冷かにして、皚々と白きものを空に飛ばしぬ。わけのぼる麓の途も埋れては、山賤が軒際の杉もたわみ、吹雪の末の谷に氷りては、千仞の底に崩れゆくなだれの聲もすごかりき。折しもいづかたに詣づるにかあらん、簑かさに身を隱して、藁靴に履みなづみては路を急ぎ行く人あり、風に吹き惱まされては、木かげにたゝづみ、雪に行手を搔けされては、少時道のへにたゆたひぬ、軈て御佛わがめられたる御堂の門にたどりつきて、やう〳〵庵ある方にたづね入り、簑笠の雪をはらひ退けて、立ちし姿をうち見やれば、擬ふ方もなきかの在五の君なりけり、案內き

こえて主人の聖に對面あり、手をとりてはしばし涙にくれたまひしが、此聖ころかしこしやかの惟喬の皇子なりけれ、時は貞觀十四年正月、ところは比叡の山の麓にして小野の山里なり、さてもさいつ頃、水無瀬の殿の夜遊にわかれ奉りしのち、皇子は何事をか感じおはしましけん、年わくるまゝに、惜しき御髪ぐそとおろしたまひて、この山里へはかくれさせたまひけるなり、公事のしげきにたづね奉ることもをくれて、けふ雪の日のふりはへてまかりけるに、おもひがけなくも、法師姿のあさましく、たちいでさせたまひけるに、業平がおぞろき如何なりけん、むかしの事など語りてはなき、泣きてはかたり、くるゝもわかで物語りに時をうつしけるが、かくてのみやはとて立ちいでんとする時

わすれては夢かとぞおもふおもひきや
　　ゆきふみわけて君をみんとは

悲しき心のきはみを寄て、かく謠ひいでけるなり、千古の名吟まさに絶妙と稱すべし、皇子が心やいかにおはしけん、ぬるゝ袂はかつ氷りて、身は氷柱の如く立ちすくみたまひつ、業平が後姿の消ゆる迄、眺め入りたまひけり。皇子其折の御返しにもや、新古今集に見えたる歌あり

ゆめかとも何かおもはんうき世をば
　　うむかざりけんはどぞくやしき

又この皇子の詠とて古今集に見えたるは

白雲のたえずたなびくみねにだに
　　住めばすみぬる世にこそありけれ

無心のうちおもひやり奉りて、なみだとゞめわへず、嗚呼此悲痛に引きかへてかの良房の大臣が

年ふればよはひは老いぬしかはあれど
　　花をしみれば物おもひもなし

といはれたる、あるは御堂關白道長が

この世をば我世とぞおもふ望月の

かけたる事もなしとおもへば

と、得意思ひ遣れたる歌とを合せ見れば、あはれ此皇子王孫の不幸悲嘆、察するに餘りありといふべし。

京の大原野には藤原氏が氏神天の兒屋根命をまつりたり、春日明神といふもこの神の事也、貞觀十八年の頃か、藤原の一族、二條の御息所を押立て大原詣の儀あり、此の二條后とよばれし高子は、養父兄弟等が力によりて、首尾よく清和帝の宮中に入り、貞觀十年十二月を以て、陽成帝をうみ奉りければ、一族の喜びたとふるにものなく、さては此氏神詣も其得意の心より起りけるありけり、初め高子業平のために疵付けられて、醜聞漸く世に聞えんとしたれども、一族等が苦心の末に其あとを塗抹し去りて、何となく官女の列として禁中に納られ、左右の意をとりて内寢に入り、遂に本意の如く懷孕して、皇子を生み奉りければ、御息所と崇められて、昔日の惡名はまさに消去らんとせり、女車のうちふかく世をかくれて、遂に昔を知られざる高子は、今日の大原詣の御供に列りて、よく舊年の眞狀を知れる人の、而も老い朽ちて、見苦しくも車の後べに從ひ居るを見ては、いかばかり其心を痛めたる事ぞ、業平時に右近衛權中將の官に任せられて、年正に五十一歳の老爺となれり、艶ありしりの容貌の美も、華やかなりし其すがたも、三十年來の風雨にみるかげもなくなりて、春鶯の涙徒らにとけず、秋蟬の殼漫りに暴されて、今は昔日の在五の君たるを知る人もなし、高子時に三十四なり、盛のよはひ少しく過ぎたりといへども、紅粉絲黛の裝ひ、況んや錦繡の衣につゝまれて、金銀の裝ひこめたる車の中に、端然としてあらん事、たれかは又當代天皇が寵幸の美姫として、仰ぎ見ざるものなからんや。て業平も諸臣の數にもれずして、御車より祿給はりけるが、いとど昔のおもはれて

大原や小鹽の松もけふこそは
神代のことをおもひいづらめ

とよみいでゝ、心ばかりを慰めたり、松に御息所をよせて、神代の昔を思さずやとかこちたる、高子もいかに胸いたかりけん。業平今は母を失ひ、君を出家せしめて、世に力を致すところなきに、此壯大なる儀に參列して、仇敵のために人知れぬ憂目をうけ

んとは、かなしみても嘆きても、甲斐なかりし世のためしなり。

（十三）　加茂の岩本

加茂の岩本橋本は業平實方なり吉水和尚「月をめで花をながめしいにしへのやさしき人はこゝに在原」とよみたまひけるは岩本の社とこそうけたまはりおき侍れ、云々（徒然草）

加茂岩本の明神は、實に在五中將業平朝臣の神靈を崇めたるところなり、生れて人の器となり、死して神の列に崇められる、業平生涯の不平不幸も、猶慰むに足るべくや、あゝ棺を負ふて萬事さだまる、人間の眞價は沒後にあり、「あるときはありのすさびにくかりきなくてぞ人は戀しかりける」とは眞理なり、感情的批判は生前のおもてにむかつてこうおこれ、死して枯骨となる、たれか正確なる智識的の評論を下さゞらんや、

一箇人としての業平朝臣は、まことに幸福きはまりなき人なり、天然の麗質は捨てがたくして、才幹人にすぐれ、膂力よく人にまさりて又武伎にくらからず、實に不足なき男兒の好標本なりといふ可し、然れども、其の一たび社會にのぞむや、右近衛府の武官としては更に武功の名なく、其惟喬の皇子を扶けて、當年の政治家中に奔走したるに當ては、遂に身を醜陋の汚穢中に下しても、其成功を企つること能はざりき、これ業平が政治家たるの不能を示すものか、否不能なるにあらず、時の不幸に際して力の及はざりしによるもの、在原氏紀氏共に勢力の應援なく、孤立の身を以て藤氏の大威力にあたる。龍車にむかふ螳螂も其危きを嘆すべきなり。素より兄行平が小經濟の器に比すべきものならんや。業平が手段は積極的にして行平の如きは消極的なるのみ、勿論同日の談にあらず。只詩人としての業平に至りては、千古無比、一生の感慨をよせて放吟長歌せしもの、何ぞ徒に情を撓めたる俗詩人と共に語るを得ん、彼れは不遇不平の餘憤によりて、其詩才は戛然として高く妙音を傳へたるもの、バイロンが狂熱シエレイが熱情、みなこれ一列の好詩人なり、而して淫逸不羈婦女子をもてあそぶ事の多きを以て、其の失德をせむるものありといへども、ろは大方伊勢物語全卷を以て業平が事のみと誤讀したるともがらなり、よしや業平は女をもてあそびたりとするも、たゞ女性の美を

愛したる人なるのみ、汚れたる肉體の獸慾を喜こびたる者にあらず、感情を以て女を愚弄したるにもあらず、眞に女性の美を愛して其柔らかき手には世をもわすれ、暇さ接吻に感謝したりしなり。況んや當時の風習の然らしむる處ありしものをや。ひとり業平を捕へて品性問題の判決を與ふるは酷なる可し、此說たるや南郭先生の論に止まらず、吾人も又之れを主張せんと欲するもの、身王孫にありて、位卑く官進まず、大業遂に成らずして其名人に疑はれ、生涯を通じて不幸に終りたる人、聖代の恩澤に浴して神と敬せられ、其名漸く千載の龜鑑たらんとするに至りては、更に特筆して業平も實は幸福の人なりといふに憚る處あらんや。（明治卅一年四月稿）

二、業平とバイロン

狂熱なる詩人業平は英のバイロンと酷肖するの一生を有したりき。嗚呼實にジョージ、ゴルドン、ノエル、バイロンの名は、我が平安朝の花として文名百世に隱れなき業平の化身なるかを疑はしむる事よ。

業平は身王孫の尊きにありて、當時また殿上の佳公子になりき。バイロン初めにありて賤しき父母に依て家庭の快樂とても得る事能はざりしが、後大叔父ロールド、バイロンの逝くに當ては、忽ち其門地を襲ぎて男爵となり、堂々たる貴族を以て詩人の間に横行したる、彼と是との身分また如何なれば似る事の多きや。

業平の容貌と性行とを傳へたる三代實錄には体貌閑麗放縱不拘とあり、あゝ綽々として迫らず、優々として傲らざる、尤も男らしき美男子は、己に幼くして人の心を動かしたりき。況んや其人は道心堅き僧侶なるに於てをや、僧空海の弟眞雅僧都は、業平の美貌を垣間見て、愛慕の心措く能はざりき。乃ち其意を歌に寄せて曰く

思ひいづるときはの山の岩つゞし
いはねばこそあれ戀しきものを

と何ぞ其言葉の切にして且つ傷めるや。斯くばかりも男子をして思ひ惑はしめし業平の美貌、こもまたバイロンに似る事の多からずや。バイロン、ウオター、スコットと比しく趁跛たりしも、身の丈五尺八寸五分、頭髮縮れて茶褐色を帶び、朱唇皓齒、容貌

花の如くうるはしかりきと、

業平の一生好色を以て嘲罵の評を加へられぬ、さらばバイロンの一生も好色の嘲罵を加ふべきものあるべし。好色とは何ぞや、これ僞善者の聲のみ、好色とは多感なる愛の變名にあらざるか。罵る者よ、汝は女性の何者たるを知るか。シエークスピーアはいはずや、彼れは女なり故に口說く事を得べし、彼れは女なり故に我物となすを得べしと。これ女性を誨辱したるにあらず、女性の運命を宣言したる天意なるのみ。こゝに於てか愛は自然なり、生命なり、光榮これに依て生じ、希望これに依て發す。而も詩人の多感なる、猶陶物の脆きに似たらずや。物に當て乃ち碎け散る、嗚呼淸くして美しき事よ。これをしも好色といはば詩人の生涯は醜行の汚點を以て滿されん、蓋しこは道學者の心のみ、道を以て詩才を拘束す不自然の甚しきもの、好色を以て詩人を嘲罵す頑迷これより甚しきはなし。業平といはずバイロンと謂はず寔に一世の多感的詩人なり、純戀愛詩人なり、業平の戀物語を知る者はよろしくバイロンが戀の經歷を辿て、其春の如き光、其花の如き薰を、討ぬるに躊躇する事勿れ。バイロン八歲にしてメリーダップを想ひ、青年となつて從姉妹を戀ひ、學生となつてマスター夫人を慕へり、而して幾多の美人は皆渠が爲めに惱殺せられぬ。業平の戀物語、いかなれば又これに似たる事の甚しきや。

當時藤氏の迫害と屈辱とに逢ふや、去て東國に遊べり、漠々たる武藏野の夕雲は、尾花が末に低くして、落日のおもひに涙といめあへざりし人よ、乙は英國を去て瑞西の風光に遊び、『何ぞ我が腐敗せる本國の空氣を吸はんや』と叫ばしめ、縱橫憚らず、肆に酒色に耽り、百の嘲罵をも物の數にもせざりし人に、如何なれば、又似たる事の多き事ぞや。業平が東國に志を滿さんとしたるは、バイロンが希臘の獨立戰爭に力めたるに比しく、大丈夫の魄は活々として働けり。

業平東國より歸りて京に入るや、復官の恩命に浴して二條の后が大原詣に從ひぬ。二條の后高子は業平が若年の戀人にあらずや、今其人が行啓の儀に列らる、業平の胸中熱血迸るのおもひ、察するに餘りあるべし、今これを反對にしては、バイロンが戀人ラム孃、精神病院より馬車を驅て出て來るや、バイロンの葬儀に會す、狂するが如くに

吃驚したる嬢は、この突如たる出來事に傷みて遂に沒するに至れりといふ。これ一は詩人自らの愁ひ、一は戀人が慘たる末路、事實に於て異る處ありといへども、心に於て其趣き毫も違ふところあるなし。

嗚呼業平とバイロン、東西時を同うせずといへとも、比しく天にあつては輝く星と現し、比しく地にあつては薫ずる花と咲かん、不朽の詩才は香木に彫りし墜のあとの、寂びて益々匂ふが如くに、高き高き其おもひ、清き清き其こゝろ。われは相似たる此詩人を敬愛してやまざるなり

三、業平の歌

牧者エンデミオン、はデアナの神の接吻に依て、常世に其容色を失はざりきと、嗚呼不朽不滅の美、奚で斐牧者の私するに委し去らんや。天上の星光、地上の花卉、詩人が採て世を飾らんとするものは、これみな不朽の美不滅の榮にはあらざるか。然り其詩は實に人生を修飾するの色彩なり、人間を慰籍するの音樂なり。こゝを以て詩人の世に出でたる、誠に天使の如き觀ありて存す。嗚呼貴き狂熱の詩人よ。嗚呼清き戀愛詩人よ。吾はこれをわが國に於て得たるを喜ぶ、寔に無比の光榮ありといふべし。而して在原業平朝臣は、これ吾尤も敬愛する狂熱の詩人にして、わが文學史上に其光榮を特筆すべき唯一の大詩人なり。然るを頭腦無き古人は、たゞ其人の製作に對しても、「其心ありて詞足らず」といひ「心深からねどもおもしろき所あり」といひ「花の色無くして匂ひ殘れるが如し」とのみに言ひ定めたり、如何なれば其疎略にして曖昧なるや。評家の世に乏しくして而も幼稚なりし、事また疑ふ可らざるの事實ならん。

「桐火桶」の評家は曰く

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして
ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにも成まさるかな
つゐに行くみちとはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを

『春かせふき弱りたる明はのゝ山の端、かすみたえ〳〵にして、いとけしきばえたるに、はのかに見え初むる色は、花なるらんかしとおぼゆるためしにや。』と、こも亦美辭を呈

したるものに過ぎずして、未だ業平が歌をつくしたるの評にあらざるべし。吾人が卑見を以てすれば業平が歌は、能く其體に於て研究するとまわなかるべからず。體とは何ぞや、曰く歌振りなり。これ正しく業平の如何なる詩人なるかを定むるに於て必用わればなり、當時未だ題詠と稱する弊害少かりし爲め、題知らずとひふべき作物の多きを認むれども、業平が歌は實に歌の想よりする純然たる題知らずなり。蓋し題知らずといふも想より推して題名の附すべきものの尠からず、これ純然たる題知らずにあらず。斯くの如きは其客觀に於て一の主體ともなるべきものわればなり。素より歌題と稱するものも所謂戀、無常、を除くの外は、みなこれ客觀の事物ならずや、故を以て題詠然たる歌、乃ち貫之等一派の如きは客觀に依賴せる舒事舒景の詩人なれども、業平の如きゝ主觀に傾きたる舒情の詩人といはざる可らず。純然たる題知らずの作物わるも此故のみ、渠は『櫻』に對しても

世の中に絶えて櫻のなかりせば
春の心はのどけからまし

といひ、毫も『櫻』の艶麗をいはず、『春』の胎蕩たるをいはざるは非凡ならずや。渠はたゞ『櫻』が『春』に咲出でたる無二の讃美をうたへるに過ぎず。而も『春』の全局面は此花に依て動かさるゝものたる事をたゝへて、『櫻』の絶美を主觀的にいひあらはし、更に『春の心はのどけからまし』、との如き積極的の詞を用ひたるは、實に渠が崇高なる理想の反映なりと稱すべし。而して業平の歌に就ては、純舒景純舒事の作物を見出すこと頗る難し、たゞ僅に

晴るゝ夜の星か河邊の螢かも
　我住むかたの海人のたく火か
信濃なるあさまのたけに立つけむり
　遠近人のみやはとがめぬ

の如きを得たるに過ぎざりき。又渠が凡べてを積極的に、且つは熱誠的に、所謂極度より極度に及ぼすが如き眞情を以ていひあらはせるものなり。

けふこずはあすは雪とぞ降なまし

消ずはありとも花とみましや
植し植へば秋なき時や咲ざらん
花こうあらめねさへ枯めや
梅花ちりかひくもれ老らくの
こむといふなるみちまがに
大方は月をもめでしこれぞこの
つもれば人の花となるもの
あかなくにまだきに月のかくるゝか
山の端逃げて入れずもありなん
世のなかにさらぬ別れのなくもがな
千代もと祈る人の子のため
花にあかぬ歎きはいつもせしかども
けふの今夜に似る時はなし

思ふには忍ぶる事ぞまけにける
あふにしかへばさもあらばあれ

の如きこれなり。期くれ渠の歌は熱誠なり、直情なり、劇烈なり、崇高なり、片々として弱きこと蝶の如きに似ず、朗々として高音を張る鶴の如きなり。殊に莊重ある哲理をつたへたるもの『月に對しては』『積れば人の老とぞなる』といひ『戀に對して』は『思ふには忍ぶる事の負けにける』といへる類、嗚呼大詩人は大哲學者なるかな。こゝに於てこれを見れば業平の歌は不滅の美辭にして、靈あるが如き其響きはなかく人間の慰藉たらんや。況んや

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ
我身一つはもとの身にして
忘れてはゆめとぞ思ふ思ひきや
雪ふみわけて君を見んとは

といへるに至りては千古の絶調、其人を見るが如きの感ありて存す。殊に又渠が一生

を飾れる戀愛に對しては
見ずもあらず見もせぬ人の戀しきに
あやなくけふは眺めくらさん
といひてそろなる戀の盲目を語り、
秋の野に笹分けしつゆの袖よりも
あはでこしよぞひぢまさりける
といひて、薄倖なる戀の淋しげなるをなげき、
人知れぬ我通路の關守は
よひ〳〵ごとにうちもねならん
といひて、障碍ある戀路の可憐なるを愁ひ、
ねぬるよの夢をはかなみまどろめば
彌はかなにも成り增るかな
といひて、戀の運命の暗憺たるを悲み、

かゝらでもありにし物を白雲の
つゞひもふればまさる我戀
といひて、戀の刻一刻に彌增ゆりく心狀を形容し
戀しきに消かへりつゝ朝つゆの
けさはおきゐん心ちこそせね
といひて、戀の惱亂をあらはし
伊勢の海に遊ぶあまとも成にしか
浪にき分けてみるめうつさん
見るめかるかたやいつくぞ棹さして
我におしへよ海士の釣舟
といひて、戀の初心をうたひ
くれぬとてねてゆくべきもわらおくに
たゞる〳〵もかへるまされり

といひて、愚痴なる戀の失望をかこち

思ふには忍ぶることゞ負けにける
逢ふにしかへばさもあらばあれ

といひて戀愛哲學の玄理を說きたり。嗚呼渠が戀愛に就ては熱情の上にも熱情なり、眞實極まれる其言や、滾々として盡させぬ純美の詩泉は、たゞ〳〵長き製作を得ざりしをうらみとするのみ。而も又渠が一生の戀に疲れたる事よ、敢て愚痴に陷れりとしも嗤ふ勿れ、バイロンが『愛して同時に賢からんことは難事なり』といへるにも徵せ、アントニーの賢なるも、老いて猶クレヲパトラの爲めに死せしにはあらざるか。ソロモンの智、釋迦の聖、これを以てするも戀愛の前には或は躊躇すべきにはあらざるか。

業平の歌に對して、吾人が其想の觀察はおほかた斯の如し、然れども今若しそれを修辭の上に移せば、更に又一段の奇才を認むるものあらん。渠が調は流暢にして活達あり。其措辭の獨特なる、當時の詩壇に一頭地をぬくものありといふべし。先づ「櫻花ちりかひくもれ』といひ『老らくの來んといふみち』といひ『身を知る雨』といひ『赤や昔の春おもはぬ』といひ『我ゐる山の風早み』といひ『山の端逃げて』といひ『かの子ま だら』といひ一列に奇拔の文字なり、多趣味の言語なり、詩化したる簡明の言葉なり。而してこれを用ふるに巧なる事、殆ど神の如きは、古今獨步の妙を得たりといふに憚らじ。然れどもこれ末技のみ、渠が眞價は實に熱情ある戀愛詩人、純然たる主觀派の詩人、更に進んでは詩人もしき詩人たるにありと稱すべし。

四、業平の愛

業平が女性に對する心情を觀察して、われは尠からず其狂熱の詩人なりしを欣びぬ。或者は道德の尺度に宛てゝ、其人の不倫を叫びしといへども、こは疑もなく僞善者の世を欺かんとする聲のみ。人爲の醜を以て自然の美を掩はんとしたる偏狹なる觀察に過ぎざるのみ。美の世界を與へられたる詩人をして、人の子の笞杖に服せよと叫ぶは、同情の念に乏しき俗物の所爲なるを免れず。花より花にあこがれ行く蜜蜂を知らず

や。美しさより美しさに轉ずる詩人の一生は、猶花をたづぬる蜜蜂の如きなり。其移氣を咎むる勿れ。蓋し貞操とは凡俗を縛すべき社會の縄目なり、これを以て漫りに詩人を律せんとするは、美しき花の枝ぶりを矯めんとするよりも醜き事なり。詩人が愛の雫は恰も夕露の脆きが如く、美しきに觸れてはろ〳〵とこぼれん事、實には其眞情を狂ぐる事なきによればならん。況んやまた狂熱の詩人に於てをや。渠等は天眞爛熳の美を盡くして憚る事なく、怖るゝ事なく、渠等の心は常世に輝き永久に若やかなり。何ぞ世の女性に對して、其愛の赴くところを抑制するあらんや。渠等はどこまでも積極的なり、普般的なり。活々たる愛の炎は常に燃上りて、遂に死灰となるの期なきもの〻如し。業平は狂熱ある詩人なり。いかでか僞善者の鞭を加へて、不倫の囚屋に社會の罪人たるを問はん。今こゝには其政治家としての手段を論せず、詩人としての行爲を窺ふに於て、其女性に對する愛の尤も清かりしを知る、また寸毫の狂ぐる事なかりしを知る。寔に詐なきの靈性を發揮したるものといふべし。

業平都にあれば幾多の美姫競うて媚を送り、業平田園に去れば幾多の村娘、爭うて之を迎ふ。愛の世界に光榮を得たりし業平が一生は、實に多幸のものにてありき。

梓弓ひけどひかねどむかしより
こゝろは君によりにし物を
わひ思はでかれぬる人をとゞめかね
わが身は今ぞきえはてぬめる

いつのまにうつろふいろのつきぬらん
きみがさとには春かるらし

とは、みな田舍少女が渠に捧げたる愛の贈物にてありき。『心は君によりにし物を』とは如何に其言の清列にして熱誠なるや。愛の齋壇に身を捧げしめたる潔さは、プラトンが所謂献身的なるもの、業平ならずして誰か此美しきを享くる事を得んや。『わか身は今ぞきえはてぬめる』とは如何に切情の麗しき事よ。一たび人を戀ふて離別の愁に逢ふ、悲しみこれに優るものなし。こゝに於てか「消え果てん」といへる女の心は、これ其愛の極緻にして、美の眞髓を穿ちたるの言なり。『うつろふいろのつきにけん』と

は詩人の移氣をうらめるもの、業平もこゝに至りては罪作りの男なり、否むしろ果報の男なりしといはざるを得ず。

伊勢齋宮の女御に關せる渠が戀愛談は、又更に可憐なり。

○君やこしわれやゆきけんおもほえず
　夢かうつゝかねてかさめてか

とは齋宮のよみれこせたる歌なり。嗚呼戀路は夢なるかな、正しく春の夜の花を抱けるが如き夢なりけるよ。

かきくらす心のやみにまどひにき
　夢うつゝとはこよひさだめよ

とは業平の返歌なりき。嗚呼「かきくらす心のやみ」よ。戀路は更に暗黑にして、足を辿れる人々はみな盲目たる事よ。業平曾て紀氏の女をめとれりしが、後之を忘れて河内の高安に通へり。紀氏の女貞婦の聞え高くして、嫉妬の色みだりに動かざりしも、寒夜龍田山を越えて獨行するを愁ひ、琴に彈いて歌ひて曰く、

風吹けば沖つしらなみたつた山
　よはにや君がひとり越ゆらむ

と、これ妻としての愛情なり、聊か沈みたる愛なり。然れども自からの傷みを抑へて切に人の身の愁を氣遣ひたるもの、まことは批難なき愛情の歌なり。而して業平の心も、これに動かされて終身此人を捨つる事能はざりき。かくしてこの女に對せる愛と、藤原氏の女高子に對せる愛とは、業平が一生に於ける尤も趣味ありし戀愛談なりしなり。要するに詩人の愛は熱誠にして生命尤も短く、いつも若やかなる光明を得んとして、情の潮はうが心裏にみなぎりてやまず。春の花の艶なるを貴で、敢て秋の果實の善きを希はず。女性を見ること花のいろ〳〵なるを賞つるが如くに、愛を博くして其一つをだに捨てざりしは、正しく胡蝶の春に伴ふが如きなり。嗚呼業平は大詩人なり。純潔なる愛を謠へる大詩人なり。たとへば美しき詩園の胡蝶なり。而も尤も長閑なりし春の朝に生れて、花の香の多くに醉ひ、秋の夕の霜に衰へて、可憐なる終焉を遂げたりし胡蝶なり。

五、小町に逢ざりし業平

古今集に云はずや。

秋の野に笹分けし朝の袖よりも
逢はでこし夜ぞひぢまさりける

○

みるめなき我身をうらと知らねばや
かれなで蜑の足たゆくゝる

小町

伊勢物語更に其間の消息を傳へていふ。

「むかし男有けり、あはじともいはざりける女の、さすがなりけるが許に、いひやりける」

と、こゝに於てか知る。業平は遂に絶世の美人に逢はざりし事を。佳人と才子、非凡の詩人と非凡の女詩人とが、相知て相逢ふ能はざりし恨みは、蓋し綿々としてつくる事やあからん。小町がよめる歌とて、

思ひつゝぬればや人の見えつらん
夢と知りせばさめざらましを

とは、業平を戀ひての歌なりとかいへり。よしや正史の表面に確證なしとするも、此人にして彼人を戀ひ、戀ひて悶の苦しきをかこちたる事の、かくもあるべきは當然なり。われ思ふ業平と小町とをして當時戀の舞臺の伎藝者たらしめば、平安の歌壇は天國の樂みをみるが如きものありしならん。況んや渠等が一生をや。彼のバルンスが女流文士クラリンダーを得たるに劣る事なく更に大詩人ダンテが絶世の美人ビアトリスを得たりしよりも幸福なりしものならん。嗚呼愛の御神は此兩人の詩人をして青春の期に會合せしめ、尤も輝きたる戀の衣を裝はしめて、比類稀なる光榮の冠を渠等の頭上には與へざりしぞ。

六、業平の終焉

元慶四年五月二十八日、詩人業平は此日を以て遂に他界の人とはなりぬ。寂々たる春宮の朝、黄鳥其聲咽んで、霞空しくさまよひ。離々たる秋苑の夕、胡蝶其翅衰へて、雨徒らに飛ぐ。嗚呼てゝに大詩人業平を失ひて、わが平安朝の詩境も蕭條として落莫の感なき能はず。渠は非凡の天才を抱いて舒情詩人の先驅者となり、戀愛詩人の主力者となり、平調なるわが詩界に不滅の光明を掲け得たり。而もまた渠は一面に於て當年政治界の大達物となり、縱横奇策をめぐらして、驕慢至極なる藤原氏を倒さんとしたり。かくて其男らしき振舞は、バイロンが希獵の獨立につくし、歐洲列强の間に處して雄然レバント進擊軍の指揮官となり、猶四千磅の巨財をもこれに向て抛ちたるにも似たりしなり。嗚呼斯くの如きの大丈夫、嗚呼斯くの如きの大詩人、天にあつては或は神たりしならんも地に生れては遂に一箇の秀才たりしを免れざりし人、過て齡を凡俗の間に得たりしかば、渠は不幸にも、わが世の終焉に傲ふの己むを得ざるに至りぬ。然り渠は元慶四年の春五月。百花匂ひ禽語のどかなる日に於て、再び覺めざるの眠には就きしなりき。彼のシエレーが「ドン、ジュアン號」に乘じて海に航し、一朝の颶風に船破れて、悲しき死體をリギオの海邊にとゞめたるとゝ、バイロンが戀人キッチョリーと兄弟と郊外に遊び、熱の胃すところなり、遂に鬼籍に入るを免るゝ能はざりしと共に、詩人が終焉は果敢なくもまたあはれなりき。業平當年正に五十一歳、なましめき花の顏色も衰へて、あらはなりし霜鬢には老の容も裝ひがたく、失意失望の淵に身は沈み果てゝ、遂に其戰はんの力も消え果てしにてありき。然れども胸中の苦悶は波の如くに動搖きぬ、風の如くに立騷ぎぬ、敵者の榮華と名譽とは此時に當つては無上の大打擊を渠が頭上に加へたるにも比しかりき。渠は昏瞑して起つ事能はざるも、耐へがたき苦痛の悶えと忍びなき耻辱の恨みとは、猶炎々として心裏に燃上れり、よしや形體は朽ち行きたるも心神活々として動けるが如き業平の終焉は、恰も火山の烟を吹かざるにも比しかりしなるべし。炎々たる烟の絶えたるは正しく火山の生命を失ひしものならんも、猶其火脈は大地の底に流れたり。政治家たりし業平が終焉まことに斯くの如きのみ況んや大詩人の最後をや。そは老いたる鶯の如くならざりし乎。渠は天地の美妙をうたひ盡くしぬ。花は渠の爲めに匂ひ、月は渠のために輝きしが、限ありし其生

命は、風前の花と散て再び開かず、波間の月と碎けて再び圓なる事能はざりき。然れども其美音やあらず。其詩才や蓋し不滅の力を以てこれ永刼の響を有したりき。けに詩人としての業平が最期は春鶯の老いて囀るゝが如くにやさしかりしなり。これは春を謳ひ盡くして斃れ、かれは宇宙の美妙をうたひつくして去りたり而して政治家たりし其終焉の煩悶は、詩人たりし其終焉のうるはしきに於て救はれぬ。嗚呼やさしくもうるはしかりし詩人業平の終焉は、輝ける雲悵の如くに垂れて、天の御使は溫かき御手を下すかと見れば、渠が身を扶け起して遠く天上に伴ひ去るにてありき。靈香は薫じ來りて喜びの音樂は響きわたれり。而もまた此時の渠が容は、美しかりき、清かりき、彌が上にも尊かりき。ろも元慶四年の五月二十八日、正に吾等が記憶すべき此日は、駘蕩たる春の眞中にして、百花は霞の間に其艶麗を競ふの時なりけるなり。

詩人業平終

伊勢物語評話

落合直文　前田林外
鳳晶子　宇治の山人
水野蝶郎　平出露花
栗島狹衣　與謝野鐵幹

むかし、男ありけり、初冠して、奈良の京、春日の里に、しるよしして、狩りに往にけり、その里にいとなまめきたる女はらから住みけり。かの男かいまみてけり。古里にいとはしたなくてありければ、こゝちまどひにけり。男、着たりける狩衣の裾をきりて、歌をかきてやる。ろの男、信夫ずりの狩衣をなむ着たりける。

春日野のわか紫のすり衣
　しのぶのみだれかぎり知られず

となむおひつぎて云ひやりける。ついでおもしろきことゝや思ひけむ。陸奥のしの

ゑもじすゑ誰ゆゑにみだれそめにし我ならなくに、と云ふ歌の心ばえなり。むかし人はかくいち早きみやびをなむしける。

（鐵幹）むかし男云々と云ふやうな書き出しは、この以前には見えぬやうですが。

（直文）この物語が始めで、今昔物語などは之の眞似です。

（鐵）初冠は元冠早々と解したい。兎に解成年の意に。

（林外）女はらからと此處にあるのは何だか親の無い姉妹のやうな感じがします。

（直）さう深く考へずとも、たゞ奈良の人で、女の姉妹と見れば宜いでせう。

（林）『なまめいた』は今日の艶なと云ふ意でせうか、それとも心生づいた位の意でせうか。

（直）艶の方。『はしたなくて』は淋しく便る所もなく、わびずまひをして居るのです。

（鐵）『心地まどひにけり』は、垣間見てうゞろに成つたのであらう。狩衣の裾を切つのは餘程面白い。

（直）衣の裏に書いたりするのは此頃の風俗だから、裾をきるやうな事もしたのであらう。

（狩衣）狩衣の裾はいくらか長く出來てゐる。だから切つたとも思はれる。また狩衣の制と云ふものは、延喜彈正式に凡裁二絹絶一爲二織衣袴一悉皆禁斷とありますから、當時の狩衣は尤も質撲な布製の凛々しいのに、信夫摺と云ふ意氣な摺摸樣、ニヤケた風は微塵無いのが殊に嬉しい。

（鐵）『しのぶのみだれ云々』と云ふ隱喩は面白い。地の文の『心持まどひにけり』は之を正面から説明したのです。近頃我等の中で『戀のみだれ』とか『歌のみだれ』とか歌ふのは、この『みだれ』と同意です。『春日野の若紫』には、艶な姉妹を含めてあるやうに思はれますが。

（直）勿論。

（晶）この歌は巧な歌と思ひます。かぎり知られずは、この時代で珍しい修辭でせう。

（林）歌をかきてやると有つて、又おひつきてやると二度書いたのは、重複して興味を減じます。

(鐵)重複してゐるのは古文の文体で、『之等は重複の中でも面白い所でせう。

(林)むかし人云々も蛇足のやうです、趣味を害します。

(宇治の山人)この句は、むかし男ありけりに照應して面白いちやありませんか。

(鐵)いち早きと云ふ地の評は、前の『ついでおもしろきことやと思ひけむ』と云ふ地の評と共に、必要な句だと思ふ。初冠と云ひ、垣間見と云ひ。おひつきてと云ひ、いち早きと云ふので、即興の風流が能く描寫されてゐる。この一節で一番面白いのは『垣間見てこゝちまどひにけり』の一句だと思ひます。

(狹)遊獵の歸りに雨に逢うて、高遠の大貳が女の宿へ立寄られたる宇多院の話は、宇治拾遺にも見えてゐるが、こゝの初冠の人が垣間見をしたと云ふ話と思合せて見れば、誠に時代の見える優美な風流なれども自然な事柄だと思はれる。獵場、獵裝束などの雄々しのに對して、里住の女の飾り氣のない、而も艶な姿が好い取合せで、大時代の演劇趣味が籠つて居ると思ひます。

むかし男ありけり、奈良の都ははなれ、この都は、人の家まだ定らざりける時に、西の都に女ありけり。その女、世の人にはまさりけり。かたちよりは心なむまさりたりける。一人のみにはあらざりけらし。それを、かのまめ男、うちものがたらひて、歸りきて、いかゞ思ひけむ、時は彌生のついたち、雨そぼふるにやりける。

おきもせずねもせでよるをあかしては
春のものとてながめくらしつ

(鐵)一人のみにも云々は他におもひ人が有つたと云ふので、後のいかゞ思ひけむに對しての伏線です。『まめ男』には少し滑稽の意があるやうですが、私は好色な男位な意に解したい。

(直)後世では浮薄な男など云ふ意にも用ゐた例もありますが、こゝは單に親切な男と思へば宜い。

(晶)この歌は佳いので御座いませうか。

(直)纖巧に流れた惡い歌です。

(鐵)雨そぼふると云ふ地の文と、長雨をかけたながめ暮しつとは用意がある。『春のも

「のとて」は散文的です、説明です。日本の歌には斯う云ふ説明を喜ぶ風が有つて、甚だ詩趣を害してゐる。古今集以下の歌に、この弊が夥しい。

（林）文章も初段の方が面白いやうに思はれますが。

（鐵）『ひとりのみにも』あたりが佳いと云へば佳いのでせうか。

むかし男ありけり。懸想しける女のもとに、ひじきもと云ふものやるとて、

思あらばむぐらの宿にねもしなむ
ひしきものには袖をしつつも

（二）條の后の、まだみかどにも仕うまつり給はで、たゞ人にておはしける時の事なり。

（晶）こゝの文は、言はゞ歌のはしがきでせう。

（林）本に依つてこの歌の初句を『思ひあらば』と言ふのと『思ひなくば』と云ふのと二つあるやうですが、僕は『思ひあらば』の方が好からうと思ふ。

（鐵）思あらばが無論よい。

（晶）思ひあらばは、愁の思ひでなくてなさけあらばで御座いませう。

（鐵）歌も散文的の好くない歌です。

（狹）貞觀元年に高子が十八歳で五節の舞姫に出ました。この舞姫は天皇の後宮となる試驗ですから、此時高子は兎にも角にも及第して入内の榮を得たと思はれます。ここの關係が入内以前の事とすれば、高子は十六七、業平は三十二三の男盛と思はれます。

むかし、ひんがしの五條に、大きさいの宮おはしましける西のたいに、すむ人有けり。それを、ほいにはあらで、心ざしふかゝりける人、ゆきとぶらひけるを、む月の十日ばかりに、ほかにかくれけり。ありところはきけど、人のゆきかよふべき所にもあらざりければ、猶うしと思ひつゝなんありける。又の年のむ月に、梅の花盛に、去年を戀ひてゆきて、たちてみ、ゐて見、みれど、去年に似るべくもあらず。うちなきて、あばらなるいたじきに、月のかたぶくまでふせりて、去年を戀ひてよめる。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ
我身ひとつはもとの身にして

とよみて、夜のほのぼのと明くるに、泣く〳〵歸りにけり。

(直)ほいよはあらで――、何も男はその人を目ざして居たのではない、つまり何かの出來ついでに起つた……この處には無論多少の時間があります。

(林)言ひかへれば『行り掛上』と云ふ意でせう。

(鐵)私はこれは大に議論のある事でもあらうが、例の業平の政略上から來たので、この『ほい』は、初めは戀が本意ではなかつたと云ふ意に解したい。

(晶)行きとぶらふ人は志が深かつたのですけれど、女は心ゆかぬさまであつた。そのほいでは御座んすまいか。

(直)こゝで見ると、決して策略的とは見られない。

(林)私は『ほいにはあらで』を『む月の十日ばかり』の上に挿んで、女が本意でなく外にかくされた、と解したら面白いと思ひます。

(直)『ほいにはあらで』は『行きとぶらひけるを』で切れた文脈です。前田君の說は無理でせう。

(鐵)『月やあらぬ』の歌は、短詩形の中に複雜な内容を包んだ作で、この以前には例の少い歌かと思ふ。それから一二三句の修辭が餘り巧み過ぎるので、却て眞情をこめた作でないやうな感がする。

(晶)私、至情の歌かと思ひます。四五の句がございます爲めに、一二三の句も巧み過ぎたとは思はれませぬ。

(直)この時代の歌として、餘りに内容が複雜過ぎる。つまり斯う言ふ歌を見て、業平の歌を『言葉足ならず』などと貫之が云つたのでせう。

(鐵)内容の複雜なのと修辭の細かいのとが、この歌の賞め所であらう。それにしても一二三の句は巧み過ぎる。勿論好い歌にはちがひ無い。

(晶)この一段は伊勢のなかで、叙情の文として最も優れた所と思ひます。

(鐵)歌もうまひが、文章が歌に叶つてうまい。『たちて見、ゐて見、みれど、去年に似るべくもあらず』と云ひ、『打泣きて、あばらなる板じきに』と云ひ、更に結んで『夜のほのぼのと明くるに、泣く〳〵歸りにけり』と云つたのは、次第に腸を抉られる

やうで泣かずには居られぬ、誠に同情の溢れた書き振りだと思ひます。

むかし男ありけり、東の五條わたりに、いとしのびていきけり、みろかなる所なれば、門よりもえ入らでわらべのふみあけたる、築土のくづれよりかよひけり。人しげくもあらねど、度かさなりければ、あるじ聞きつけて、ろの通ひ路に、夜毎に人をすゑて、まもらせければ、かの男ゆけどもえ逢はで歸りけり。さてよめる、

人しれぬわが通ひぢの關守は
　宵々ごとにうちもねなむ

とよみけるを聞きて、いといたふあんじけり。あるじ許してけり。二條の后にしひてまゐりけるを、世のきこえありければ、兄人達のまもらせ給ひけるとぞ。

(林)ここの戀は甚だ滑稽な戀ですね。

(鐵)僕は斯のやうな戀は非常に面白からうと思ふ。つまり正々堂々と門からは這入らないで、築土の崩れた所などから忍びに通ふと云ふので、讀んでも斯樣な戀は趣味が深い。

(直)こゝの歌なんかは今から見ると如何にも滑稽じみてゐるが、例の人目の關など言ふ基をひらいた、其時代には甚だしく歡迎せられた、極く質朴な歌だつたのでせう。

(林)伊勢の中で、この歌などは隨分拙い方でせう。內容は好いが。

(字)まあ恐痴ですね。併し此時代には歌の功力などゝ云ふ事が重く見られたのですから、そこらも酌量してやらねばなりませぬ。

(鐵)歌として拙づいが、この關守と云ふ譬喩は面白い。他のとは一風ちがつて、こゝのは夜の關守なので、宵々ごとに寐ないのだから面白い。

(狹)高子を五條の宮に預けて置たのは藤原氏の政略です。全體清和帝と高子とは九歲も高子が年うへで、それに業平との關係が纏綿してゐます。だから容易な事では女御の撰には預りにくいので、清和帝の母后で高子の姨君である五條后明子の許へ、高子を預けた。大鏡にも『この后の宮仕しそめ給ひけむやうこそ覺束なけれ』とあつて、猶又『されば世の常の御かしづきにては御覽じうめられずやおはしましけむと覺え侍る。もしはなれぬ御中にて、染殿の宮に參りかよひなどし給ひけむ程の事にやとぞ押計らるゝ』

とあるのが、よく藤氏の秘密をあばいてゐます。ですから此處の夜毎の關守は、双方とも戀の掛引以外に、面白い意味がある事と信じます。

むかし男ありけり、女のえ逢ふまじかりけるを、よばひわたりけるを、からうじてぬすみ出てゝ、いとくらきに來けり。あくた川といふ川を、ゐていきければ、草のうへにおきたりける露を、かれはなにぞとなん男に問ひけるを、ゆくさきはいと遠く、夜もふけにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたうふりければ、あばらなるくらに、女をば奥におしいれて、男は弓やなぐひを負ひて戸口にをり。はや夜も明けなんと思ひつゝゐたりけるに、鬼はやひと口に喰ひてけり。あなやといひけれど、神のなるさわぎに、え聞かざりけり。やう〳〵夜もあけゆくに見れば、ゐてこし女なし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉かなにぞと人のとひしとき
露とこたへてけなましものを

これは二條の后の、いとこの女御の御もとに、つかうまつるやうにてゐ給へりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、ぬすみて負ひて出でたりけるを、御せうと堀川のおとゞ、太郎國經の大納言、まだ下らうにて内へまゐり給ふに、いみじうなく人あるをきゝつけて、とゞめてとりかへし給ひてけり。それをかく鬼とはいふなりけり。まだいとわかくてたゞ人におはしけるをりの事どかや。

(直)この文章は歌が先づあつて、其後へつけた文章です。

(晶)こゝの鬼は唯だ鬼のことゝ解釋した方がよいでせう、

(鐵)『あなや』と女の聲を挿んのだので、全體の凄味を增してゐる。又歌の修辭が非常に好い、一字も改められぬ作だ。

(直)鬼に食はれて死んだ(即消えた)のだから、同じ消えるのならば、露と消えたならばよかつたのです。

(宇)こゝでは二人が共に消えたらばよかつたらうと見るのです。地の文の露は、雷雨がある前だから、電の光で露が見えたのでせう。

(直)この鬼は我々が想像して居るやうに所謂人間であい鬼です。言はゞ女を喰うて血

などは少しも見せなかつた故(消えたのだから見える譯がない)鬼の業だなどゝ言ふ奇妙な感想は、當時の人に珍しくない事でせう。

(晶)鬼を假說と致しましたなら、雷雨はたゞうれに添へました迄の事でせう。

(宇)この歌などは餘程明星派に近い。

(鐵)文章の方では單に『何ぞ』と問うたばかりなのを、歌の方で『白玉か何ぞ』と詞藻を用ゐたのは氣の利いた所です。地の文に『何ぞ』と問ふた答がない所に追手を怖れて雷雨の中を慌しく遁げるさまを想はせてあるのは巧い。

むかし男ありけり、都にありわびて、あづまにいきけるに、伊勢尾張の間の海邊をゆくに、浪のいと白く立つを見て、

いとゞしく過ぎにしかたのこひしきに
　　羨しくもかへる浪かな

(宇)立ちかへる浪を見て、過ぎこし方を思ふと云ふのは、眞情の歌だと思ひます、

(鐵)『いとゞしく』の一語を地の文の『都にありわびて』に對照してみると、誠に涙がある。『かへる』浪に歸ると翻るとを懸けたのは、此時代の好い修辭ですけれど、今日の私共には趣味を減じます。

むかし男ありけり、その男、身はえうなきものに思ひなして、都にあらじ、すむべき處もとめむとて行きけり。信濃の國淺間の嶽に煙の立つを見て、

信濃なる淺間が嶽に立つけぶり遠方びとの見やは咎めぬ

(狹)この段の東下りと言ふのが頗る怪しい。實際の歷史から考へて見ればどうしても。僕は先づ來られまいと思ふ。と言つて來たやうな事蹟があるのだからをかしい、此時代の休暇と言へば、やはり今の官吏と同じやうに、長いので二三ヶ月なものです、それに東下りは是非共二三年位はかゝらなければ出來ぬ話。それで出來ないとすれば官位なども進んで居なければならぬ。だから業平が解官されて凡人としての旅行と見て事實としたが面白い。

(直)業平の東下は歷史としては誠に漠然たる問題です、これは或は土人の口碑に止まつて居るのかも知れぬが、小田原の近傍に惟喬親王の子を葬つたと云ふ舊蹟が殘つて

居る。少しは參考になるかも知れぬ。

(晁)『身をやうなきものに思ひなして』に、唯だ泣いてやれば好いのでせう。

(林)この淺間の烟は三河邊から見たのだらう。

(鐵)遠方を通る人誰も見ぬ者は無からう位に取つたら好い。

(林)別に何の意もない散文のやうな歌です。

もとより友とする人、ひとりふたりしていきけり。道知れる人々なくて、まどひいきけり、三河の國の八橋といふ所に至りぬ。そこをやつ橋といふことは、水のくもでに流れて、木八つわたせるによりてなん八つ橋といひける。その澤に、かきつばたいとおもしろく咲きたの陰におりゐて、かれいひ食ひけり。

り、それを見て、ある人のいはく、かきつばたといふ五もじを、句の上にすゑて、旅のこゝろをよめといひければよめる。

唐衣きゝつなれにしつましあれば
遥々きぬる旅をしぞ思ふ。

とよめりければ、皆人、かれいひの上になみだおとしてはとびにけり。

(林)『旅をしぞ』の『し』は何の爲めでせう、句に力を持たせるつもりでせうか。

(鐵)『しぞ』は調子に過ぎぬ、『無きにしもあらず』の『し』と同じで、字が足らぬので入れるのではない、句を強める爲めなのです。これは『ぞ』と『思ふ』の間を、讀者の主觀で補つて見るので、頗る融通の利く句法です『かきつばた』おどいふ事を置いて歌をよんだのは、この以前には無いやうだが、多分この頃から流行仕出したものでせう。『はとび』云々は其頃の旅の寫實でせうけれど、滑稽の嫌があります。

ゆき〳〵て駿河の國に到りぬ。うつの山にいたりて、わが入らむとする道は、いと暗う細きに、蔦かつらはひしげりて、物心ぼそく、すずろなるめを見ることと思ふに、修行者(すぎやうざ)あひたり。かゝる道に如何でおはするといふに、見れは、見し人なりけり。京に、ろの人のもとに、文かきてつく。

駿河なるうつの山べのうつつにも
夢にも人の逢はぬなりけり

(宇)『暗う』は何か雑草でも生ひ茂つてる感がする。

(林)こゝの修行者は何んな振りで歩いて居るのでせう。

(宇)まあ西行のやうな僧、

(晶)多少世心のある僧でせう、西行とは餘程ちがひがございませう。

(鐵)『細う』と言ふ爲に『暗い』と言つたのも面白いが『行かう』と言ふ所を、わざと『いらん』とやつた一句が、如何にも好いと思ひます『すゞるなるめと』言うたので、この山の凄さうな、草木が生ひ茂つた景色が、何だか目に見えるやう。うの寂しい道で人に遇つたのだから、どんなに嬉しかつたらう。況して舊知の人として見れば。

(林)この坊さんは旅を仕て居たのだから、顔はいかにも眞黑に日にやけて、眼ばかり光つて居たにちがひない。

(鐵)貧僧だらうか。

(狹)貧僧はひどい。

(鐵)何だか優な品の好い坊さんの、京をうらぶれて出た人のやう。

(鐵)うつの山は、例の『うつゝにも』と云ひたいまでの序の句で、今日から見ると輕佻のやうに思はれる。

(晶)でも、うつの山でよんだ歌ですから、殊更たくんだのではないのでせう。

(鐵)文章の方では、うつの山で僧に遇つたと言ひ、歌では夢にも遇はぬと叙した、この照應がおもしろい。

(直)『人にあはぬ』と云ふと自分から人に遇はないので、『人にあはぬ』と云ふのは人から遇ひに來ないと云ふのです。

富士の山を見れば、五月の晦日に、雪いと白うふれり。

時しらぬ山は富士の根いつとてか
鹿子まだらに雪の降るらむ

その山は、ここにたとへば、比叡の山を、はたちばりかさねあげたらむほどして、形は鹽尻のやうになむありける。

(狹)餘りに日本人は數と言ふ事に意を止めないのに、ここに『はたちばかり』とやつた

のは珍しい。

(鐵)八百萬なとと多くの數は隨分用ゐるやうだが、少しばかりの斯樣なのは如何にも珍らしい。

(直)ここにたとへば』の『ここに』は、この都の事で例へて言へばと云ふのです。

猶ゆきゆきて、武藏の國と、下つふさの國との中に、いとおほきなる河あり。ろれをすみだ河といふ。ろの河のほとりにむれゐて、思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなと、わびあへるに、わたしもり、はや船に乘れ、日もくれぬといふに、乘りて渡らむとするに、みな人物わびしくて、京におもふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の、はしと足と赤き、鴫のおほきさなる、水の上にあろびつゝ、いをくふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見しらず。わたしもりに問ひければ、

これなん都鳥といふをきゝて、

名にしおはゞいざ言問はん都鳥
わが思ふ人はありやなしやと

とよめければ、船こぞりてなきにけり。

(鐵)ここは武藏と下總の境で、この川を渡れば、また自分らは一つ國を越えて、それ丈京に遠ざかると云ふ、誠に淋しい折柄です。『みな人わびしく』は旅の眞情でせう。誠にあはれが深い一段です。

(直)隅田川の所在については今日ても色々の議論がある。或は武藏と下總の境だと言ひ、或は武藏相摸の境だと言ひ、ろれが爲めに隅田川考と言ふやうな一冊の書物が出來てゐる位だから、今日の隅田川が、果してこの條にある隅田川だつたか何うか、ろこは解らない。

(林)こゝでは何所の隅田川にしても差支はありますまい。

(宇)『ありやなしや』は存在するか何うだか、變りはないかと云ふ、總ての感情をこめたもので、思ひ人のことのみでなく、萬感交々都のことに思ひ及んだのでせう。

(晶)たゞ情人の事とのみ見ては如何でせう。『京に思ふ人なきにしもあらず』の人々がろれで打萎れたのでせう。

(鐵)渡し守など言ふ奴等は極く無情なもので『早く船に乘れ』と強ひる、人々は今この船に乘れば、又京から夫れ丈隔たると言ふので、非常に都が戀しく、ためらつた處が甚だ面白い。殊に皆が都々と云ふことばかり思ひ泛べてゐる時に、突然『これなん都鳥』とやられたので、其の都鳥が非常に強く胸にこたへたのであらう。

むかし男、武藏の國までまどひありきけり。さて其の國にある女をよばひけり。父はこと人にあはせんといひけるを、母なんあでなる人にと心づけたりける。父はなほ人にて、母なん藤原なりける。さてなんあで人にと思ひける。このむこがねによみて、おこせたりける。すむ所なむ入間の郡みよし野の里なりける。

みよし野の田の面の雁もひたぶるに
君がかたにぞよると鳴くなる

むこがね、かへし、

わがかたによると鳴くみよし野の
田の面の雁をいつか忘れむ

となむ。人の國にても、かかる事は絶えずぞありける。

(露花)『父はこと人に云々』と先づ一斷定を下して、夫から説明を後にする、斯樣な句法は伊勢には他にも澤山ある。泣菫君の美文などにも能くあるやつだ。

(蝶郎)單に事實を有のまゝに寫したのみで、歌も文も、さほど面白い所ではありませぬ。

(林外)僕は又この一段は文と云ひ歌と云ひ、いかにも素朴で、其の時代の田舍人までも聯想される。誠に面白い所だらうと思ひます。

(蝶)雁の比喩などを見ても、素朴なさまは備へませぬ。

(狹衣)『母なん藤原氏云々』僕は宮仕などした立派な女が田舍の國守などへ嫁くといふのが、當時でも一番氣樂な生活であつた爲め、此母といふ人も其風習を追ふた人で暗に妻君天下らしいのを示して居るのがおもしろい。

(晶子)私は源氏の空蟬が伊豫介に附きましたとのやうよ、妻の方から見まして、そんな人に下りました、うの藤原氏の如何にもうらぶれた樣が目に見えるやうに思ひま

す。

(露)蕪村の更衣の句が思ひ當る樣で面白い。

(鐵)母が代つて娘の事を歌つてやるのもまた面白いではないか。

むかし男、あづまへ行きけるに、友だちに、道より云ひおこせける。

わするなよほどは雲井にならぬとも
空ゆく月のめぐりあふまで

評なし。

むかし男ありけり。人のむすめをぬすみて、武藏野へゐてゆくほどに、ぬす人なりければ、國の守にからめられにけり。女をば草むらの中にかくしおきてにげにけり。みちくる人、この野は、ぬす人あなりとて、火つけんとすれば、女わびて、

むさし野は今日はな燒きそわか草の
つまもこもれり我もこもれり

とよむを聞きて、女をばとりて、ともにゐて往にけり。

(蝶)簡潔な中に、人々の情が能く現れてゐます。

(鐵)連れて逃げたのが妙、草に隱したのが妙、歌をよんでわびたのが妙。

(晶)男はその女だけを隱しておいて、窃にその國を逃れやうとしたのに、そのわりない情の切な歌を聞いて、ともに又連れて行つたのと思つたら惡いでせうか。

(鐵)それはこの文章の改造した上の趣味で今の問題には成らない。

(晶)でも後も先も構はないで連れて逃げたら、業平らしくて面白いのに。

(鐵)泣く〳〵連れられて行く女に、ひと言も交はさずに別れたのも趣味があるでは無らうか。

むかし、武藏なる男、京なる女のもとに、きこゆればはづかし、きこえねばくるしとかきて、うはがきに武藏あぶみとかきて、れこせて後、おとづれずありにたれば、都より女、

むさし鎧さすがにかけてたのむには
問はぬもつらし問ふもうるさし

とあるを見てなむ、たへがたき心地しける。

とへば云ふとはねばうらむ武藏あぶみ
かかる折よや人は死ぬらむ

(鐵)きこゆれば耻し、きこえねばつらしと言ふことは、世に處する上に、誰も心苦しく思ふ感情で、誰も經驗する所だが、こゝは戀の上に用ゐて、一層人を感動さする情が深い。

(林)この句は警句です、所含の意味が多い。

(晶)私ども戀より外としては何もうつりませんけれども。——悶えに美といふものを求めますなら、これ程美しい煩悶は無いでせう。それが能く現れてゐます丈け、いゝと思ひます。

(露)むさし鐙は隨分氣の利いた洒落でわつたらう。

(むかし男、みちの國にすゞろにゆきいたりにけり。そこなる女、京の人はめづらかにやおぼへけん、せちに思へる心なんありける。さてかの女、

なか〳〵に戀にしなずは桑子にぞ
なるべかりける玉の緒ばかり

歌さへぞ鄙びたりける。さすがにあはれとや思ひけむ、いさてねにけり。夜深く出でにければ、女、

夜もあけばきつにはめおむくだかけの
まだきに啼きてせなをやりつる

と云へるに、男、都へなむ往ぬるとて、

栗原のあねはの松の人ならば
都のつとにいざと云はましを

と云へりければ、よろこびて、思ひけり思ひけりとぞ云ひをりける。

(林)歌の二首とも鄙びてゐるのが面白い。

(蝶)思ひけりを重ねた所に、田舍人の情の極致が現はれてゐる。

(鐵)『さすがにあはれとや思ひけむ、いさてねにけり』が一段の骨子であらう。『人な

らば』を古人が『人らしい女であつたら』と解釋してゐるのは、この女に同情の無い曲解だ。

むかし、陸奥にて、なでふことなき人の娘にかよひけるを、あやしう、さやうにてあるべき女にはあらず見えければ、

しのぶ山しのびてかよふ道もがな
人の心の奥も見るべく

女、かぎりなくめでたしと思へど、さるさがなきえびす所にて、いかがはせむ。

(蝶)この女には無限の同情が寄ります。

(晶)さう、うの以上の評は無いでせう。

(露)餘程つまつた文章です。我々がこんなに書いたら、夫こそ少しも解らぬものが出來やう。簡潔と言へば夫れに違ひないが、この位になつては寧ろ弊だと思ふ。全体に何か物足らぬやう、餘りにつゞめ過ぎてある。

(鐵)心のおくに、みちのくの奥をかけたのが、この時代の歌の技巧だ。

(林)僕はこれで立派なものだと思ふ。

むかし、紀の有常といふ人ありけり、三代の帝につかうまつりて、時にあひけれどのちは世かはり時うつりにければ、世のつねの人のごともあらず。人がらは、心うつくしう、あでやかなることを好みて、こと人にも似ず、よのわたらひ心もなく、まづしくても猶むかしよかりし時のこゝろながらに、世の常のこともあらず。年頃あひなれたるめ、やう〳〵とこはなれて、つひに尼になりて、姉のさきだちて、尼になりにけるがもとへゆく。男まことにむつまじき事こうなかりけれ、今はとていくを、いとあはれとは思ひけれど、貧しければ、するわざもなかりけり。思ひわびて、ねんごろにあひかたらひける友だちのもとに、かう〳〵、今はとてまかるを、何事もいささかなる事もえせで、つかはすこととかきて、おくに

手を折りてへにける年をかぞふれば
十と云ひつつ四つはへにけり

この友だち、これを見て、いとあはれとおもひて、よるのものまで、おくりてよめ

る。

年だにも十とて四つは經にけるを
　いくたび君をたのみきぬらん

かくいひやりたりければ、よろこびにそへて、

　これやこのあまの羽衣うべしこそ
　　君がみけしに奉りけれ

よろこびに堪へかねて、また、

　秋やくる露やまがふとおもふまで
　　あるは涙のふるにぞありける

(蝶)文章は佳いが、歌は見るに足りませぬ。

(林)文章としては如何にも有數なものです。この短かい内に有常の性格は誠によく書き顯されてある。

(蝶)業平の同情のある人と云ふ事も現れてゐる。

(露)歌とても決して捨てたものではない。

(林)一體東洋の婦人は、只一意夫に依頼するばかりが能で、少しでも夫を助けて事を爲さうなどと思ふのは少い。夫の榮華の時代にばかり附いて、一たび逆境にあへば、直に走つて尼に成るなどの例が多い。

(蝶)その振り捨てて行く女に、眞情をつくす有常は誠になつかしい。

(晶)女にも少なからぬあはれはあるでせう。運命がその樣に成つてまゐりまして、自はゝ、二人の性格が合ひませなんだから、夫れでさう云ふ悲しい事に成つたのでせう。

(鐵)世の戰ひに破れて、猶當年の志を改めぬ有常の性格、榮華の破裂に失望して夫の逆境に同情の無い妻の性格、鄭重な贈り物をして、せめてもの慰籍を故人に與ふる業平の性格、この三つが完全に描寫されてゐる。僕はこの三人のどれにも同情が寄るが、ことに夫の志を窺ひ知らぬ妻を可愛相だと思ふ。諸君は尼に成つたのを譯もなく夫を捨てたやうに云はれるけれど、この時代の婦人の理想は勢利の人に嫁して百年を華やかに醉つたり狂つたりして終らうと云ふのに外ならぬ。若し夫が叶はねば貧賤な生

活の中に圓滿な夫妻の戀を維持するなどの考よりも、耻辱だ、生甲斐のないと云ふことが重く視られた時代だから、親や夫を棄てても尼に成つて世を逃れると云ふ風で有つた。それらの事を考へると、何も今日の倫理や道德で批判すべき事では無い。夫婦など云ふ形の上、名の上の約束は輕く視られて、一世の榮華と云ふ事の方が重かつたのであるから、その時代では誠に餘儀ない結果だらうと思ふ。有常は大らかな襟度の云はゞ世才の無い人で、妻は寧ろ世事に明るく逆境に生耻を曝す事が誠に堪へられなかつたのであらう。

むかし、年ごろおとづれざりける人の、さくらのさかりに、見に來たりければ、あるじ、

けふこずばあすは雪とぞふりなまし
消えずはありとも花と見ましや

かへし、

あだなりと名にこそたてれ櫻花
年にまれなる人もまちけり

(露)一口に云へば、丸で理窟の云ひッくらをして居るに過ぎぬ。

昔、なま心ある女ありけり。男ちからうありけり。女うたよむ人なりければ、ところみんとて、菊の花のうつろへるを折りて、男のもとへやる。

くれなゐに匂ふはいづら白雪の
枝もとをゝにふるかとも見ゆ

男、しらずよみによみける。

くれなゐにはふがうへの白雪は
をりける人の袖かとぞ見る

(蝶)業平にも、こんな事があるのですヲ。

(鐵)『知らずよみによみける』と云ふ句だけが面白いかヲ。

むかし男、宮仕したる女の方に、御達なりける人を、相知りて程もなくかれにけり。おなじ所なれば、女の目には見ゆるものから、男は有るものにも思ひ足らねば、女、

天雲のようにも人のなりゆくか
　さすがに目には見ゆるものから

と、よめりければ、男かへし

ゆきかへりそらにのみしてふることは
　わが居る山の風はやみなり

とよめりけるは、あまた男ある女になんありける。

(林)場合は中々興がある。歌は面白くない。

(鐵)男は有るものにも思ひたらねばの場合に趣味があるのでせう。男、大和にある女を見て、よばひてあひにけり。さてほどへて、宮づかへする人なりければ、かへり來る道に、彌生ばかりに、かへでのもみぢの、ひとおもしろきを折りて、女のもとに、道よりいひやる。

君がためたをれる枝は春ながら
　かくこそ秋のもみぢしにけれ

とてやりければ、返事は京につきてなむもてきたりける。

いつのまにうつろふ色のつきぬらん
　君が里には春なかるらし

(林)風流が面白い。

(鐵)まあ記事文のやうなものですが、おなじ即興でも、狩衣の裾をきつてやつたのとは比べものには成るまい。

(狩衣)云、此評話全篇を完結したるものならねども、拙著「業平」を出版するに當りて、一は其考ともなし、一は業平が事蹟を記述したる物語の、新研究に就て、聊か其模範ともなさばやとの考案なり、蓋し拙著のみに對する資料としては餘りある附錄なるべし。

伊勢物語評話(終)

明治三十四年十二月三日印刷
明治三十四年十二月十二日發行

定價金貳拾錢
郵稅金四錢

著作權所有

編輯兼發行者　東京麹町區三番町五十三番地　上村才六

印刷者　東京京橋區南紺屋町廿四番地　岡田錬一

印刷所　東京京橋區南紺屋町廿四番地　岡田印刷所

發行所　東京麹町區三番町五十三番地　鳴皐書院

發賣元　東京神田區美土代町三丁目拾六番地　集成館

文海指針
青年機關

新思潮

毎月二回　五日、廿日發行
定價金八錢　郵稅金一錢

新思潮發刊日猶淺きにも不拘文海の指針たる青年の機關たる當初の宣言に背かずして今日の文壇に貢献しつゝあるは世既に定評あり江湖の才俊幸に愛顧を賜へ

誌友規定

新思潮は毎號投寄の作品に對して差等を付し當撰の諸子を誌友に推撰し本誌の擴張を依囑す

誌友に對しては左の特權を與ふ

一漢詩、和歌、俳句の三種中本人の望みに任せ一ヶ月五首以内無料にて其點刪批評に應ず（返稿を望むものは返稿料を送るべし）

一鳴皐書院發行の圖書はすべて定價の二割引にて其需に應ず

新思潮投稿規定

自由共和の樂園を以て自ら任するの本誌が斯る規定を設けたるは本院に於て發行しある他の雜誌の原稿と互に混亂するの故障を避け最も公平に最も親切に諸君の玉什を紹介せんことを期するにあるのみ

◎用紙は半紙大にして一枚廿行廿四字詰の割合たるべし◎字體は楷書にて認め左右天地に相當の餘白を存すべし◎同一の原稿紙に別種の作品を認むべからず又作品を異にする毎に必ず住所姓名を明記すべし◎投稿は鳴皐書院編輯局宛とし封皮には新思潮原稿と朱書すべし

鳴皐書院新刊圖書

既刊

芭蕉翁

◎雨谷一栞庵著　◎口繪芭蕉翁肖像挿入

定價金拾五錢　郵税金貳錢

人物の評傳に於ける著者の技倆は世推して獨壇と稱す今や得意の筆を揮つて蕉翁の面目を寫し更に進んで正風體は自然體である自然の滅ひぬ間は正風體は決して滅ひはせぬと絶叫せり

目次　◎芭蕉翁の誕生◎正風以前の俳壇◎芭蕉翁の遁世◎芭蕉翁江都に入る◎深川の芭蕉庵◎芭蕉翁の人物◎芭蕉翁の詩想◎芭蕉翁と旅行◎芭蕉翁の交遊◎芭蕉翁の示寂◎芭蕉翁寂後の俳壇◎芭蕉翁の文章

再版

蜀山人

◎勝間舟人著　◎口繪蜀山人肖像挿入

定價金拾五錢　郵税金二錢

著者夙に蜀山の性行を戀ひ其人格學識等或は正面より或は側面より研鑽數年にして此書を成す實に其筆路の嫌曲滑脱なるのみにあらず考證の精密なるは從來世に行はるゝ傳記等に比し優に一頭地を抽けるものといふべし

目次　◎蜀山の人物◎蜀山の亨けたる教育◎蜀山の言行◎蜀山の交遊◎蜀山の狂歌狂詩及狂文◎蜀山の評判◎蜀山拾遺◎附錄　蜀山百首

◎雨谷一栞庵著◎馬琴肖像挿入

曲亭馬琴

定價金拾五錢

郵税金貳錢

曲亭馬琴は實に我邦文壇に於ける一大豪傑であつた、其前代に於て馬琴程の大手腕を有するものが無かつたのみならず、現に明治の今日ですら似寄つた大作家も無いのである。

とは是著者が此書の冒頭に於ける斷案である、目次如左

◎馬琴の誕生時代……▲文壇の情勢▲政治上の變遷▲風俗人情の推移◎當時の戲作界◎作者の理想及時代の嗜好◎馬琴と其處女作◎馬琴と臂肆及畫工◎馬琴の人物及性行◎馬琴の生活◎馬琴の抱負◎馬琴の素養と精勵◎馬琴と作の評判◎家庭に於ける馬琴◎馬琴の交遊◎馬琴と八犬傳◎馬琴の詩歌俳句

發行所　東京麹町區三番町五十三番地　鳴皐書院

發賣元　東京神田區美土代町三丁目十六番地　集成館

194

鳴皐書院圖書目錄

有明月	東洋の波瀾	閨秀日記文
さくら	勤學捷徑	涼月新荷
現代の人物	蜀山人	芭蕉翁
佳人と才子	社會と文學	禪學小史
捫虱小錄	百人一首通解	

郵定税價 金四拾五錢	同税價 金四拾五錢	同税價 金四拾五錢
郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢
郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢
郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢
郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢
郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢
郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢
郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢

形容語及故事	算數奇觀	作文秘訣
十二ヶ月文範 上下二冊	遊記文範	記事文範
書牘文範	廿八大家文鈔	英國小學生徒
涼篁	小哲學	續小哲學
新考物學	續新考物	

郵定税價 金十四五錢	同税價 金十四五錢	同税價 金十四五錢
郵定税價 各金四拾五錢	郵定税價 各金四拾五錢	郵定税價 各金四拾五錢
郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢
郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢
郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢
郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢
郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢
郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢	郵定税價 金四拾五錢

30
194

9.12. 2

30
194

086054-000-4

30-194

詩人業平

栗島　狭衣／著

M34
DBD-0739